

## 博士論文公表の仕方についての表書き

乙 12 号の学位を授与された者による博士論文「旧約聖書におけるイスラエル 12 部族の歴史の変遷と陰影」の公表について、以下のとおり、標題・目次および2つの要約公表を以て行うものとする。

- ・博士論文 標題
- ・博士論文 目次
- ・博士論文 要約 1

### 旧約聖書におけるイスラエル 12 部族の歴史の変遷と陰影（前編）

博士論文第 1 章「イスラエル 12 部族の全体像-序論的考察-」における 1.1 「イスラエル 12 部族とは何か」の要約、及び博士論文第 2 章「主の担い手、レビについて」の結論の要約、博士論文第 3 章「ヨセフの部族について」における 3.1 「ヨセフの家について」及び 3.2.2 「王制定着までの指導者 サムエル」の要約、及び博士論文第 4 章「ダンおよびマイナー諸部族について」における 4.1 「ダン族の特殊性」及び 4.4 「その他のマイナー部族について」の要約

- ・博士論文 要約 2

### 旧約聖書におけるイスラエル 12 部族の歴史の変遷と陰影（後編）

博士論文第 5 章「ベニヤミンについて」における 5.1 「ベニヤミン族の特性」及び 5.2 「ベニヤミン族の王サウル」の要約、博士論文第 6 章「ユダについて」における 6.1 「創世記におけるユダ」、6.2 「ユダの家の継続」及び 6.3 「ダビデの家について」の要約、及び博士論文「結論～イスラエル 12 部族の陰影と栄光～」の要約

「旧約聖書における

イスラエル12部族の歴史的変遷と陰影」

宮崎 薫

# 目 次

略語表・凡例	9
<b>第1章 イスラエル12部族の全体像 ～序論的考察～</b>	<b>12</b>
1.1 イスラエル12部族とは何か	12
1.1.1 関心の所在	12
1.1.2 二つの捉え方	13
1.1.3 研究の方法論について	15
1.2 「部族」という存在について	17
1.2.1 「部族」とは何か	17
1.2.2 部族社会としてのイスラエル	17
1.2.2.1 アンフィクチオニー仮説と「12」数	19
1.2.2.2 部族連合＝イスラエル というあり方の再考	21
1.3 「イスラエル」という存在について	23
1.3.1 メルネプタの「イスラエル」と最初期のイスラエル	23
1.3.2 「イスラエル」という名称	24
1.3.2.1 ヤコブへの命名 創世記32章	24
1.3.2.2 土地への固執という視点	25
1.4 結論	27
<b>第2章 主の担い手、レビについて</b>	<b>29</b>
2.1 個人としてのレビ	29
2.1.1 ヤコブの息子の「レビ」	29
2.1.1.1 イスラエルに結びつくレビ 創世記29章	29
2.1.1.2 ヤコブに逆らうレビ 創世記34章	30
a シメオンとレビ	31
b シェケムとレビ	32
c 割礼のモチーフ	34

2.1.1.3	「ヤコブの祝福」創世記49章	35
a	分けて、散らす	36
b	怒りの要素	37
c	ユダとの関連	38
2.1.1.4	世俗部族の「レビ」は存在したか	38
2.2	モーセと「レビ」・「レビ人」	39
2.2.1	出エジプト記32章	40
2.2.2	モーセに結びつくレビ人	42
2.3	祭司と「レビ人」	44
2.3.1	アロン系祭司に結びつくレビ人	44
2.3.1.1	レビの杖のアロンの名	46
2.3.1.2	コラの反逆 民数記18章	47
2.3.2	王権と祭司性の結びつき	47
2.4	申命記の「レビ人」	48
2.4.1	「レビ人祭司」	48
2.4.2	レビ人への配慮	49
2.4.3	モーセの祝福 申命記33章	50
2.5	捕囚記以降の文書と「レビ人」	51
2.5.1	レビ人の過ち エゼキエル書44章	51
2.5.2	歴代誌 神殿に仕えるレビ人	52
2.6	結論	53
<b>第3章 ヨセフの部族について</b>		<b>55</b>
3.1	ヨセフの家について	55
3.1.1	ヨセフの長子 マナセ	55
3.1.1.1	デボラの歌とマキル	56
3.1.1.2	マナセとマキルの関係	58
3.1.2	ヨセフの子ら、マナセとエフライムへの祝福	60
3.1.3	ヤコブとヨセフの家の縁組	63
3.1.4	イスラエルの起源とヨセフの家	64

3.1.5	小結論	65
3.2	エフライムについて	65
3.2.1	カナン定着までの指導者 ヨシュア	66
3.2.1.1	モーセの後継者ヨシュア	66
3.2.1.2	ヨシュアとカレブの対照	67
3.2.1.3	ヨシュアによる土地の割り当て	68
3.2.2	王制定着までの指導者 サムエル	69
3.2.2.1	サムエルの高い位置付け	69
3.2.2.2	サムエルの活動と不明瞭な出自	70
3.2.2.3	サムエルの役割と限界	72
3.2.3	ベニヤミンとの関係の変化	73
3.3	結論	74
第4章	ダンおよびマイナー諸部族について	76
4.1	ダン族の特殊性	76
4.1.1	ヤコブの息子としてのダン	76
4.1.1.1	ラケル系の長子 創世記30章	76
4.1.1.2	ヤコブの祝福 創世記49章	77
4.1.2	部族としてのダンとその人々	79
4.1.2.1	祭儀関係の技術者 出エジプト記31章	79
4.1.2.2	規模と位置付け 民数記2章、26章	79
4.1.2.3	モーセの祝福 申命記33章	80
4.1.2.4	神を冒瀆する者 レビ記24章	80
4.1.2.5	土地の割り当て ヨシュア記19章	80
4.1.2.6	アモリ人の圧迫 士師記1章	81
4.1.2.7	デボラの歌 士師記5章	81
4.1.2.8	ダン族の士師サムソン 士師記13-16章	82
4.1.2.9	ダン族の北上 士師記18章	83
4.1.2.10	歴代誌における扱い	83
4.1.2.11	エゼキエル書48章の部族表	83

4.1.3	地名としての「ダン」	83
4.1.3.1	創世記～申命記	83
4.1.3.2	「ダンからベエル・シェバまで」	84
4.1.3.3	「ダン」の地名の由来 士師記18章	84
4.1.3.4	ヤロブアムの聖所 列王記上12章	84
4.2	士師記17-18章における「ダン」	85
4.2.1	構成、主張と暗示	85
4.2.1.1	ミカの神殿の設立 (士17:1-6)	87
4.2.1.2	ミカの神殿におけるレビ人の祭司としての任命 (士17:7-13)	89
4.2.1.3	ダン族の土地の征服と神殿の設立 (士18:1-31)	91
4.2.2	士師記17-18章の祭儀の要素	96
4.2.2.1	エフライムの山地	96
4.2.2.2	神殿、彫像と鑄造	96
4.2.2.3	祭具、エフォドとテラフィム	97
4.2.2.4	列王記上12-13章との関係	98
4.3	結論	99
4.4	<補遺> その他のマイナー諸部族について	100
<b>第5章 ベニヤミンについて</b>		<b>105</b>
5.1	ベニヤミン族の特性	105
5.1.1	起源 地理的特性	105
5.1.2	創世記に描かれるベニヤミン	107
5.1.2.1	ベニヤミンの誕生物語	107
5.1.2.2	ヨセフ物語のベニヤミン	108
5.1.3	イスラエルの中のベニヤミン	110
5.1.3.1	対ベニヤミン戦争 士師記19-21章	110
5.2	ベニヤミン族の王サウル	112
5.2.1	サウルの王位とその評価	112
5.2.2	サウル王の統治と戦果	116
5.2.2.1	サウルとヤベシュ・ギルアドの関係	117

5.2.2.2	エフタ 士師記 11-12 章	121
5.2.2.3	ギルアドの歴史的変遷	123
5.2.2.4	参戦の呼びかけをめぐって	126
5.2.2.5	小結論	127
5.3	士師記 19-21 章と「ベニヤミン」	129
5.3.1	イスラエル対ベニヤミン	129
5.3.2	アンチ・サウルという見解	131
5.3.2.1	ギブアとソドム	132
5.3.2.2	ホセア書とギブア	133
5.3.2.3	「レビ人」とサウル	134
5.3.3	アンチ・ベニヤミンという見解 (イスラエル内部の対立)	138
5.3.3.1	ベニヤミンへの敵視	138
5.3.3.2	ベニヤミン喪失の危機をめぐって	140
5.3.4	捕囚後の内部の対立であるとする見解	142
5.3.4.1	ダビデ/ユダ 対 サウル/ベニヤミンか	143
5.3.4.2	帰還民と土着民の対立か	147
5.4	結論	149
<b>第6章 ユダについて</b>		<b>150</b>
6.1	創世記におけるユダ	150
6.1.1	ユダの名前、誕生物語	150
6.1.2	レアとラケルの対照	152
6.1.3	ユダと「ヨセフ物語」	155
6.1.3.1	ルベンとユダ	155
6.1.3.2	ヨセフとユダ	158
6.1.3.3	ユダに対する「ヤコブの祝福」	159
6.2	ユダの家の継続	160
6.2.1	ユダとタマル 創世記 38 章	161
6.2.2	ユダの家系への主の関与	163
6.2.3	ユダとダビデをつなぐ「ルツ記」	166

6.2.3.1	一家の存続の危機	166
6.2.3.2	人間の計画と神の意図	167
6.2.3.3	ベツレヘムについて	170
6.3	ダビデの家について	173
6.3.1	ダビデの家とユダ	173
6.3.1.1	ダビデの出自	173
6.3.1.2	ダビデの台頭と部族間の関係	175
6.3.1.3	ヘブロンとカレブ	179
6.3.1.4	ダビデの王位とサウルの家との確執	180
6.3.1.5	ダビデの反逆者	183
6.3.1.6	ダビデの家の形成	185
6.3.1.7	ダビデの王国の発展と分裂	187
6.3.2	ダビデの罪、主の愛	189
6.3.3	ダビデの家の永遠性	192
6.3.3.1	王国の滅び、ダビデへの約束	192
6.3.3.2	ナタン預言とダビデの家	194
6.3.3.3	神の箱とダビデの永遠（オーラーム）	196
6.4	結論	198
<b>第7章 捕囚後の「ユダとベニヤミン」</b>		<b>200</b>
7.1	歴代誌におけるイスラエル12部族	200
7.1.1	歴代誌の系図	200
7.1.1.1	12部族の系図	201
7.1.1.2	ベニヤミンの重視	203
	(1) 歴代誌上8章 2回目のベニヤミンの系図	204
	(2) 歴代誌上9章 3回目のベニヤミンの系図	204
7.1.2	歴代誌史家の神学的視座	206
7.1.3	「ユダとベニヤミン」を中心とする「全イスラエル」	208
7.1.4	ダビデとサウルの描かれ方の検証	210
7.1.5	小結論	212

7.2	ベニヤミンと「エステル記」	213
7.2.1	イスラエルの宿敵との戦い	214
7.2.2	ペルシア帝国における離散の民（ディアスポラ）	217
7.3	結論	219
結 論	～イスラエル12部族の陰影と栄光～	221
文献表		227

## 略 語 表

書名・雑誌・シリーズ名

AB	Anchor Bible
<i>ABD</i>	<i>Anchor Bible Dictionary</i>
<i>AJBI</i>	<i>Annual of the Japanese Biblical Institute</i>
ARM	Archives Royales de Mari
<i>ANET</i>	<i>Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament</i>
ATD	Das Alte Testament Deutsch
AYBC	The Anchor Yale Biblical Commentaries
BA	The Biblical Archaeologist
<i>BASOR</i>	<i>Bulletin of the American Schools of Oriental Research</i>
<i>BARev</i>	<i>Biblical Archaeologist Review</i>
BETHL	Bibliotheca Ephemeridum Theologiarum Lovaniensium
<i>BibInt</i>	<i>Biblical Interpretation</i>
<i>BJS</i>	<i>Brown Judaic Studies</i>
<i>BDB</i>	<i>The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon</i>
<i>BHS</i>	<i>Biblical Hebraica Stuttgartensia</i>
BWANT	Beiträge zur Wissenschaft vom Alten und Neuen Testament
<i>BZ</i>	<i>Biblische Zeitschrift</i>
BZAW	Beihefte zur Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft
<i>CBQ</i>	<i>Catholic Biblical Quarterly</i>
CC	Continental Commentary
ConBOT	Coniectanea Biblica Old Testament Series
EKK	Evangelisch-Katholischer Kommentar zum Neuen Testament
<i>EvTh</i>	<i>Evangelische Theologie</i>
<i>HALOT</i>	<i>The Hebrew and Aramaic Lexicon of The Old Testament</i>
<i>HTR</i>	<i>Harvard Theological Review</i>
ICC	International Critical Commentary
<i>JAOS</i>	<i>Journal of the American Oriental Society</i>

<i>JBL</i>	<i>Journal of Biblical Literature</i>
<i>JNES</i>	<i>Journal of Near Eastern Studies</i>
<i>JPOS</i>	<i>The Journal of the Palestine Oriental Society</i>
JPS	Jewish Publication Society of America
<i>JQR</i>	<i>The Jewish Quarterly Review</i>
<i>JSOT</i>	<i>Journal for the Study of the Old Testament</i>
JSOTSup	Journal for the Study of the Old Testament: Supplement Series
<i>JSS</i>	<i>Journal of Semitic Studies</i>
<i>JTS</i>	<i>Journal of Theological Studies</i>
LXX	Septuagint 70人訳ギリシア語聖書
MT	Masoretic Text マソラ
Mid. Ag.	Midrash Aggadah
NAC	The New American Commentary
NCBC	The New Century Bible Commentary
<i>NEA</i>	<i>Near Eastern Archaeology</i>
NTS	New Testament Studies, Cambridge
NICOT	New International Commentary on the Old Testament
OLA	Orientalia Lovaniensia Analecta
OTL	The Old Testament Library
<i>RB</i>	<i>Révue Biblique</i>
SBL	Society of Biblical Literature
SBLDS	Society of Biblical Literature Dissertation Series
SBLSP	Society of Biblical Literature Seminar Papers
<i>SJOT</i>	<i>Scandinavian Journal of the Old Testament</i>
<i>SPB</i>	<i>Studia Post Biblica</i>
<i>TDOT</i>	J. Botterweck and H. Ringgren (eds.), <i>Theological Dictionary of the Old Testament</i>
<i>ThLZ</i>	<i>Theologische Litteratur Zeitung</i>
<i>ThWAT</i>	<i>Theologisches Wörterbuch zum Alten Testament</i>
<i>TLOT</i>	<i>Theological Lexicon of the Old Testament</i>

Tosef.	Tosefta
<i>TWOT</i>	<i>Theological Wordbook of the Old Testament</i>
<i>VT</i>	<i>Vetus Testamentum</i>
VTSup	Supplements to Vetus Testamentum
WBC	Word Biblical Commentary
<i>WTJ</i>	<i>The Westminster Theological Journal</i>
<i>ZAW</i>	<i>Zeitschrift für die Alttestamentliche Wissenschaft</i>
<i>ZDPV</i>	<i>Zeitschrift des Deutschen Palästina Vereins</i>

### 聖書

創	創世記	出	出エジプト記	レビ	レビ記
民	民数記	申	申命記	ヨシュ	ヨシュア記
士	士師記	ルツ	ルツ記	サム上	サムエル記上
サム下	サムエル記下	王上	列王記上	王下	列王記下
代上	歴代誌上	代下	歴代誌下	エズ	エズラ記
ネヘ	ネヘミヤ記	エス	エステル記	詩	詩編
イザ	イザヤ書	エレ	エレミヤ書	エゼ	エゼキエル書
ホセ	ホセア書	アモ	アモス書	預言書においては「書」を省略	

### 文法用語

√ 動詞の基本形	pf. 完了形	impf. 未完了形
inf. 不定詞	cstr. 合成形	part. 分詞形
pass. 受身形	s. 単数	pl. 複数
f. 女性	m. 男性	

# 「旧約聖書におけるイスラエル12部族の歴史の変遷と陰影」～前編～<sup>1</sup>

宮寄 薫

## 第1章 イスラエル12部族の全体像 –序論的考察–

### 1 はじめに

旧約聖書全体を通して「イスラエル12部族」は様々な形で言表される。神の契約の民であるイスラエルは12部族から成るといふ主張は旧約聖書に通底しており、イスラエル12部族は歴史的にも実態を持つ集団であることは確かである。

しかしながら、12部族を構成する個々の部族に関する旧約聖書の伝承や物語には多寡や濃淡がある。各部族への扱いは対等でなく評価も多様で変化がある。旧約聖書が内包する「イスラエル12部族」をめぐる多様性の背景には、歴史的背景や書かれた時代の政治的事情があろう。なおかつ、そうした背景や事情は相互作用的に働き、旧約聖書全体の特徴に何らかの影響を及ぼしているであろう。その中であって、旧約聖書に刻まれるイスラエル12部族についての言及は、おそらくそれぞれ異なる状況における記録や主張を反映しているはずである。したがって、従来読み過ごされたような箇所にも光を当て、12部族に関する描写や表現を丹念に探求・分析し、部族間に生じた歴史的背景や織り込まれた意図を解きほぐすことによって、12部族からなるイスラエルの民のありようを立体的に把握できるのではないかと考える。そうすることによって、あるいはそこから浮かび上がってくる神学的メッセージを得られ、ひいては旧約聖書全体をよりよく理解することにも寄与できるのではないだろうか。

旧約聖書には各部族を平面的・水平的に描き、イスラエル民族の統合体としての「イスラエル12部族」の姿を映し出すテキストがある。<sup>2</sup> これらは神の契約の民イスラエル全体が一つであるという姿を宗教的・神学的に表現し主張するもので、神の契約相手である聖なる民イスラエルの構成部族の数は「12」であるという要素もここに含まれる。従来、「イスラエル12部族」の研究はそうしたテキストを主に対象としてきたと見られる。1950年代に流布した部族連合(M. ノートのアンフィクチオニー仮説)もこの捉え方によるものである。<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 本論文は博士学位論文の一部を公表することを目的とするものである。(「旧約聖書におけるイスラエル12部族の歴史の変遷と陰影」、2024年4月30日、東京神学大学博士(神学)乙第12号 学位授与。主査：小友聡東京神学大学教授、副査：左近豊青山学院大学教授、副査：田中光東京神学大学准教授)。本論文は、博士学位論文の第1章「イスラエル12部族の全体像」、第3章「ヨセフの部族について」及び第4章「ダンおよびマイナー諸部族について」を中心とする内容であり、ここに掲載するために内容を要約したり書き改めたりしたところがある。

<sup>2</sup> いわゆる部族表や系図、12部族に割り当てた当番表など。また12部族をひとまとまりの団体として描き、その中に指導的存在を立てたりする話なども含まれる。

<sup>3</sup> 1930年に出されたM. ノートの「アンフィクチオニー仮説」は、当時一世を風靡し、旧約研究者の間で広く受容されたのち、批判され、ほぼ退けられている。本論ではこの仮説の内容や議論の詳細は触れないが、古代ギリシアおよびイタリアでの12(もしくは6)数の成員による諸同盟の考察から、アンフィクチオニー

他方、12部族を構成する個々の部族に関する些細なエピソードや、個別の人物の物語を生き生きと記す聖書テキストがある。個別の部族の状況や隠れた内部事情について、私的で裏話的な側面まで伝える。とりわけ旧約聖書の物語（ナラティブ）において、独特な起伏と展開、文学的技巧や表現を提示する。これらは、「イスラエル」を形成した諸部族の歴史や、部族間の関係の歴史の変遷の痕跡を記憶にとどめておこうとするものであろう。概してこれまでの研究では、統合体としての「イスラエル 12 部族」を対象とすることに主眼が置かれており、個別の部族に関する側面は、旧約各文書の注解書や釈義の範囲内で個々に検討されても、旧約聖書全体を通して総合的に論じられることはあまりなかったのではないかと筆者はこのような認識に立って、旧約聖書における「イスラエル 12 部族」のありように関心を持ち、イスラエル 12 部族に関して読み過ぎがちな部分も含めて探求し、浮かび上がるものをつかんでみたいと考え、この研究に取り組み始めた。

研究の方法論としては文芸学的批評、修辞批判的方法が主軸となるが、ほかにも歴史批判的研究の成果、考古学的、人類学的知見も採り入れ、また地図や語源等を調べることに努めた。イスラエルおよびイスラエル 12 部族は歴史的な実態を持った存在だからである。

## 2 イスラエル 12 部族とは何か

### 1) 「部族」という存在

「部族」tribe とは、存在する人間の集団を表すがその範囲は非常に複雑である。ヘブライ語ではおもにシェベト שֵׁבֶט や マッテー מַטֵּה という語である。ミシュパハ מִשְׁפָּחָה と呼ばれる社会集団もあり、概ね「氏族」clan と訳される。旧約聖書では、イスラエルを構成する「部族」と「氏族」が混在する箇所は多く、「民族」と「部族」の区別が難しい箇所もある。ほかに、おそらく親族を意味する「父の家」ベト・アブ בֵּית־אָב という表現もある。それぞれの規模の順位や構成員については見解が異なるものの、旧約聖書における「部族」は、非常に複雑で曖昧さを含むという点では一致している。<sup>4</sup> イスラエルの宗教的部族社会としての実態は不確かであるが、イスラエルは 12 部族によって保たれる、という思想は旧約聖書に充満しているのは確かである。

そうであるなら 12 部族のそれぞれの成員はもともとの同一性によるものでなく、起源の異なる様々な人々の集団であったが、共通の目的のために生成され、共存し、維持されて一つの全イスラ

---

なる外国起源の組織形態を、12 部族連合からなるイスラエルの宗教組織の初期段階の基盤に類比させたノート仮説は 1950 年代に広く流布した。しかしもはや全面的に支持されていないのは、実際にそのような組織が存在したという証拠の資料が聖書内にも聖書外にもない点が決定的であった。興味深いのは、この仮説の根拠にもされた旧約聖書テキストは主に、ヨシヤ記 24 章、士師記 19-21 章および部族表であったことである。それらは、前述したように統合されたイスラエルを総合的に図表的に提示しているテキストであり、少なくとも宗教的民族イスラエルの形成初期段階の出来事を史実として描いたものではなからう。とくにカナン入植から士師の時代の実相を伝えている可能性は極めて低い。それらのテキストには、実現には至らなかった理念、理想形としての、宗教的に一つに連合したイスラエル 12 部族のありようが掲げられていると受け取るのが妥当であると思われる。

<sup>4</sup> C.H.J. de Geus, *The Tribes of Israel: An Investigation into Some of the Presuppositions of Martin Noth's Amphictyony Hypothesis*, Van Gorcum, 1976, pp.111-119. John W. Rogerson, *Anthropology and the Old Testament*, Growing Points in Theology, Blackwell, 1978, pp.86-9.

エルであるように合わせられたものである、ということが本質的に言えるだろう。イスラエルが 12 部族の存在において実態を持つとは、おそらく各部族が領する土地と強く結びついているということではないか。したがってイスラエルの土地への固着という視点は非常に重要となる。

## 2) 「イスラエル」という名

1895 年に発見された Merenptah Stele (メルネプタ又はメレンプタハ碑文) は、「イスラエル」と呼ばれた何らかの民族的存在が紀元前 1200 年の少し前にイスラエルに現存したという証拠史料であり、最初期のイスラエルの起源を示すものとして重要視される。「イスラエル」は、民族、王国の名であり、地名、人名も指す、広範囲な意味をもつ固有名詞である。前述のように、「イスラエル」という名称の歴史性は証明されたが、謎も多い。

旧約聖書において、イスラエルの名称に関わる特徴的な語りを含む創世記 32 章を見ていきたい。

12 部族の父祖であり族長であるヤコブが、イスラエルの名 **יִשְׂרָאֵל** を新しく授与されるさい、ペヌエルでの何者か(神?)との格闘の末、「あなたは神と闘い、人々と闘って勝ったからだ」(創 32:29/聖書協会共同訳)<sup>5</sup> と言われる。前後の文脈では、実際ヤコブがその格闘に勝ったのかどうかは曖昧であるし、「人々」とは誰かも不明である。しかしこの記事から、「イスラエル」の名には「(ヤコブが) 神と闘う」・「神が(ヤコブと) 闘う」といった意味や原因があることが示唆される。なお、「闘う」と訳された **שָׂרָה** には第 2 の意味として、rule (支配する、治める : cf. **שָׂרָר**との関連から) も示唆され、<sup>6</sup> ここから「イスラエル」には「神が支配する」の意味も含意される。<sup>7</sup>

この動詞 **שָׂרָה** の基本的な意味は、persist (=固執する、信じ続ける)、exert oneself (=努力する、尽力する)、persevere (=諦めずに耐える、頑張ってやり通す) である。<sup>8</sup> そう解釈するなら、ヤコブはこの格闘において、勝利したというより、「粘り抜いて放棄しなかった、手放さなかった、何かを主張し続けた」ので、結果として「負けなかった」というのが本意であろう。また、前置詞 **עִם** の意味は、基本的には with であるので、その場合は、「ヤコブは、神と共に、また人々と共に、粘り強く耐えて、手放さない」というポジティブな意味となり、それが可能であるのが「イスラエル」の名にふさわしいあり方だと神(ここでは **אֱלֹהִים**) が認めたという話になる。

## 3) 土地への固執という視点

もしそれが本来的な解釈であるなら、ヤコブが、その背後にいる神と人々の思いを共有しながら、耐え抜いて手放さなかったもの、あるいは自分の手で獲得し続け、自分のものであると信じて主張し続けなければならないとされているものとは何であろうか。創世記の文脈では、それは「神から

<sup>5</sup> Gen. 32 : 29 **וַיֹּאמֶר לֹא יַעֲקֹב יֹאמֶר עוֹד שָׂמָךְ בִּי אִם־יִשְׂרָאֵל בִּי־שָׂרִית עִם־אֱלֹהִים וְעִם־אֲנָשִׁים וְתוֹכֵל:**

新共同訳では、下線部は「神と人と闘って勝ったからだ」。ホセア書 12 : 4、5 も参照。

<sup>6</sup> *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon (BDB)*, p. 976.

<sup>7</sup> *Ē l persisteth, persevereth, contend (or jussive Let Ē l persist / contend)*. -BDB, p.975.

<sup>8</sup> *ibid.*

の祝福を受けること」である（創 32 : 27、30）。それは神学的に正しいが、より具体的な事柄として考えられるのは、「地」であろう。すなわち、この神が約束され、主の契約相手としての民を生かし続けるための場所＝土地 ארץ land への固執、固守こそ「イスラエル」にとっての深層部における重要課題なのではないか。

そこで、この民に授けられる「地」を固守する元祖としてのヤコブが、「イスラエル」の名を与えられるのである。したがって、ヤコブから分かれ出た 12 人の息子がのちの「イスラエル 12 部族」の父祖として名を保ち、その子らが各部族に割り当てられた神の土地を固守し続けることが神の祝福の実現になる。旧約聖書において、おそらく古い伝承であるほど、人の名はその土地の名と深く結びついているという特徴もある。イスラエルにはイスラエル固有の土地があるという主張が——それは神のもとから来た祝福であるが——、12 部族の族長（父祖）にあたるヤコブの別名としてここで明言されているのである。土地への固執と、そのための現実の様々な「格闘」をイスラエル 12 部族（とその子孫）は経験する。それらの人々の営為全般を含めての「イスラエル」、すなわち神の祝福と支配の下にある土地、およびそこに住み生きる人々が神の御意志に従って生きるありようの包括的な自己理解が「イスラエル」なのであると言えよう。

その意味では、12 部族の中にあえて固有の土地を持たない一部族（＝レビ）を据えるということは、イスラエルの宗教的特殊性を存分に表すものであると言ってよいだろう。第 2 章以下は、各論に入り、主要な部族について焦点を当てていくが、最初にレビを取り上げることとする。

## 第 2 章 主の担い手、レビについて<sup>9</sup>

イスラエル 12 部族の中で、最初にレビ族（レビ・レビ人）について論じる。イスラエルは神である「主」YHWH と結びついてこそ存在意義を維持してきた。主の律法と祭儀を専ら担い続けてきた「レビ」を抜きにしてイスラエルは存続しえなかったと考えられるからである。レビは、嗣業の土地を持たず、地理的集団としての実情が不明で、しばしば部族リストから外され、名称も複雑である。こうした不明瞭さの根源は、他部族同様かそれ以上に、イスラエルの歴史の中でたどられた複雑な経緯によるものと推測できる。

レビの名には「結びつく」という意味がある。<sup>10</sup> レビはレアから生まれたヤコブの息子として「イスラエル」に結びついて初めて意義ある位置をもつ存在であり、同時にレビの系譜は「主」に結びつく。レビは当初から、主の民イスラエルの中で主の御用をする特別な役割（職務）を担う者

<sup>9</sup> レビについてのより詳しい論述は、拙論「旧約聖書における『レビ』および『レビ人』について—主の担い手としての存在と働き」（『神学』83号、東京神学大学神学会、教文館、2021年）191-224頁を参照されたい。本稿は、紙面の制約上、論文の第2章全体の要約の掲載にとどめた。

<sup>10</sup> レビ לֵוִי [levi] の名の起源については不確定的で諸説あるようだが、創世記 31 : 34 では「今度こそ、夫は私に固く結び付けてくれるでしょう」と、「結びつく」という意味の לָקַח に帰されている。「レビ」の名を旧約聖書が לֵוִי と関連づけた意味は、最重視されるべきであろう。

として自他共に認識されていただろう。関連する創世記 34 章の記事と 49 章のヤコブの祝福は、レビ人固有の性質と主の担い手としての聖なる職務に言及する内容を含む。また、出エジプト記 32 章の出来事はレビ人の特質を示すとともに、モーセとの根源的な結びつきを語るものである。

一方、レビ人と祭司の関係は非常に複雑である。モーセの兄で祭司のアロンの唐突な登場後、アロンの家系がレビ族を治めると定められる。民数記では祭司職とレビ人は聖性と職務において明確に区別され、レビ内部にある二重構造も記される。およそ「レビ人」なる集団はモーセの権威との関連において威信と存在意義が保たれていたが、その後王権と結びついて権威を増した祭司集団との関係において「レビ人」の立場は低められたためであろう。しかし申命記では「レビ人祭司」の表現に象徴されるようにレビ人は祭司と同等の扱いを受ける。歴代誌ではレビ人は神殿に仕え、祭司と同じ聖性を持つ集団として描かれる。幕屋時代モーセに忠実であったレビ人を、イスラエルの中心聖所であるダビデ―ソロモンのエルサレムの神殿に忠実な奉仕者、また主の民「全イスラエル」の核として、歴代誌は位置付ける。歴代誌はもとより、旧約聖書の多くを書き記したのはレビ人であろう。

「レビ」および「レビ人」は、イスラエル 12 部族に内在し、歴史的な変化を受け止めながら、特別な主の担い手として働き一元的に存在した。嗣業の地はなく血縁地縁によらず、武力や財産も剥奪された代わりに、「主」を嗣業とする任務に献身した。モーセ以来、その時々の中核的存在と結びついても、変わらず「レビ」の名に立ち続け、主の民イスラエル内部に実在したのである。

### 第3章 ヨセフの部族について

#### 1 マナセ／マキル 初期イスラエルの重要部族<sup>11</sup>

イスラエル 12 部族の中に正式には「ヨセフ部族」の名はない。代わりに「ヨセフの家」として、マナセ、エフライムを数える場合もある。地理的に「北方部族」の代表ともされるが、弟格のベニヤミンとの関わりも深く、ヨセフ族が意味する範囲は明快ではない。それだけ古くからイスラエルの歴史の根幹に関わる最重要な部族であったが、イスラエル王国時代前後からの歴史的な激動の影響を容赦なく受けた部族グループであったと見られる。歴史的には、ヨセフの長子とされるマナセがエフライムより歴史的に古く、おそらく「イスラエル」部族集団の形成の初期段階に関わる重要な部族である可能性が高い。

旧約最古の資料「デボラの歌」(士 5) にマナセの名はなく、デボラの時代にマナセは一部族としては存在していなかったが、代わりにマキルがヨルダンの西側に定着しており、当時エフライムやベニヤミンと並ぶ部族／氏族だったと推測される。「マナセの半部族」とは、後に西から東に移住し

<sup>11</sup> この項目で述べる内容については、拙論「イスラエル 12 部族におけるマナセの位置」(『伝道と神学』No. 9、東京神学大学総合研究所、2019 年) 85-100 頁も参照されたい。

たマキルのことであると聖書（ヨシュ 13：29-31）は明言しており、歴史的経過ないしマナセ人の圧迫により移住の上、マナセの名を帯びるようになったと考えられる。系図上、マキルはマナセの子、東のギルアド地方を取ったのでマキルはギルアドの父とされた。マナセの前身とも言えるマキルがおそらくヨセフの家の中核であることが示唆される。マキルは、ヨセフに重なり、マナセに連なる。そうであるからこそ、イスラエルは、（レビを抜いて）マナセとエフライムを改めて12部族に迎え直す手続きをとり（創 48：8-20）、主なる神が与えた嗣業の地の恵みを十分に示そうとしたのだらう。

マナセは当初、非常に重要な位置を占めていたが、後に劣勢になる。マナセ領だった土地はオムリ政権以来サマリアとなり、アッシリアによる北王国イスラエルの滅亡と共に歴史の流れの中に埋もれていった。エジプトの Merenptah Stele に刻まれる「イスラエル」はなお謎に包まれているが、旧約聖書はエジプトとヨセフ（の家）との深い繋がりを記し、ヨセフがイスラエルの元祖であった可能性を示唆する。中でもマキルが最古のヨセフグループの名残として痕跡をとどめている。そのマキル-マナセの系譜とエフライムが共に、ヨセフの家=イスラエルを継承し、初期イスラエルの形成に貢献し発展したのであろう。

## 2 イスラエルの政治的リーダー エフライム

おそらく王国時代前まではエフライム人（部族）がイスラエルの政治的主導者としての位置を占めたであらう。モーセから直接任命を受けたヨシュア、士師時代を経てシロ（エフライム領の聖所）の祭司エリの下から出たサムエルがそうである。モーセ（レビ族）からヨシュア、エリ（レビ族）からサムエルへと受け継がれる流れは、王制以前、世襲によらず、カリスマをもったエフライム人を中心として生じていったと考えられる。イスラエルの政治的中心地は、彼らが活躍したエフライムの地（シロ、ギルガル、シェケム）であった。次第にイスラエルの中心地は南下し、主導的人物はサウル（ベニヤミン族）からダビデへと移行する。その役割を最後の士師サムエルが果たし、王国時代への橋渡しをしたと言える。

### 1) カナン定着までの指導者 ヨシュア

ヨシュアは、若い時からモーセの従者（出 17：9、33：11、民 11：28、ヨシュ 1：1）であり、モーセの生存中に、その後継者に任命された（民 27：18、申 31：7、14）人物である。彼が求めて相続地とされた（ヨシュ 19：50）エフライムの山地のティムナト・ヘレスに葬られたこと（ヨシュ 24：30、士 2：8）、エフライム族の頭のヌンの子ホシェア（民 13：8）がヨシュアと同定されていること（民 13：16）から、エフライム人と見なされる。ヨシュア記 3-4 章の記述からは、ヨシュアこそ、主がモーセを通してイスラエルに授与された掟を納め、イスラエル 12 部族の前に主の現臨を表す「神の箱」の護衛者であり、全イスラエルをカナン定着まで守り導いたモーセの後継者であるとの主張が読み取れる。モーセにも二人の息子がいたが、後を継いだのはエフライム人のヨシュアだった。これは、イスラエルの指導者は、血縁にはよらず、カリスマを受けた者（民 11：28、27：

18、34：9) によって継承されることを示す最初の例であると言えよう。しかし、ヨシュアの後を継ぐのも彼の子孫ではなかった。歴代誌はヨシュアをエフライム族の系図の最後に含めている（代上7：27）。<sup>12</sup>

ヨシュアと対照的なのが、カナンの土地取得伝承において唐突に出現し、ヨシュアと並び称せられるユダ族のカレブである。民数記14：30、38 および32：12、26における、カレブのヨシュアに対する優位性を顕著に主張する記述（おそらくユダ側の筆による）は、モーセの権威を継承したのがエフライム人ヨシュアであったという事実は一時的なものにすぎないと示すことによって、ダビデ以降のユダ部族の全イスラエルにおける首長的地位の正当性を強調しているのであろう。この点を裏付けるように、カレブは、ユダ族およびダビデと関係の深いヘブロンヘブロンの地と関連づけられている（ヨシュ14：6以下）。

## 2) 王制定着までの指導者 サムエル

サムエルは、エフライムのラマ出身で、出生時から主に献げられたナジル人（サム上1：11）とされる。旧約聖書におけるサムエルの言及（140回）は、サムエル記上下と歴代誌上下に集約される。そのほか詩編99：6、エレミヤ書15：1でも言及され、そこではサムエルはモーセ、アロンと並ぶ宗教的な重要人物に位置付けられ、主の前に立って民の執り成しをする役割を担うと考えられている。サムエル自身には「何の不正も見出されなかった」（サム上12：5）とある通り、サムエルは主の顕現をつねに受けた預言者であり、主の命令に従った人物で、その尊厳は保たれている。

サムエルは、カナン定着後の士師時代から王国時代へとイスラエルが変化してゆく転換期に立てられた偉大な指導者であったと見られたことは間違いない。

しかしながら、サムエルの重要性とイスラエル全体への影響力は、ある意味抑制されており、サムエルが活躍した時期に限定的であったように旧約聖書は記しているように受け取れる。場合によってはサムエルが否定的に書かれる箇所もあるのも否めない。

サムエルは、幼少時よりエフライムのシロの神殿において祭司エリに仕え、主の顕現によってエリの家への託宣を聞き（サム上3）、その後おそらくエリの子の滅びを見届けた。サムエルは成長後も、シロにおいて預言者として活動をし、「ダンからベエル・シェバに至るまで」のイスラエルの人々の宗教的指導者であった（サム上3：19-4：1）。その後サムエルが再登場するのは、サムエル記上7章のことで、それはシロから一旦ペリシテ人に奪われた「神の箱」がキルヤト・エアリム<sup>13</sup> に戻ってきてから20年後のこととされる。それによれば、サムエルの活動の場所が明らかに変化している。すなわち、ミツパを中心にベテル、ギルガルなどを巡回し、最後はラマに戻って生涯にわた

<sup>12</sup> ヨシュアの子孫については言及がない。任職や祭儀、土地割当て等の際にヨシュアと共にアロンの子の祭司エルアザルが登場する（民27：18以下、32：26、ヨシュ21：1）が、エルアザルの系図は後世に続いている（代上5：27以下）ことと対照的である。

<sup>13</sup> ユダ領とベニヤミン領の境界線付近に位置するキルヤト・エアリムは、かつてバアラ／バアラトと呼ばれ、ユダ領からベニヤミン領に移ったとされる（ヨシュ15：9、60、士18：12→ヨシュ18：14、28；cf. 代上13：6）。エルサレムの西側12-3 kmにある地。

ってイスラエルを治めた、とある（サム上7：6-16）。これはサムエルの活動の中心地が、エフライム領にあたる北方のシロから南下して、エフライム領との境界付近から、主にベニヤミンの領地において展開されたことを示す。

このことは、エリの子の滅びののち、サムエルがエリの後継者のようになり、イスラエルの指導的立場に立ったことを確言するものだ。同時に、前述したように、イスラエルを主導する中心地が、それまでのエフライム（シロ）から、ベニヤミンの地に移ってきたことを示している。この地理的な重心の南下は、神の箱の移動とあいまって、イスラエルの指導者の出身地および出身部族の変遷を示唆するものであると考えられる。

### ・サムエルの曖昧な出自

その一方で、サムエル自身についての記述には曖昧な点があることにも触れておきたい。

一つの問題は、サムエルの出身地である。サムエルの父エルカナは、「エフライムの山地ラマタイム・ツォフィム」の人で、先祖はエフライム人（サム上1：1）と紹介されるが、すぐ後のサムエル記上1：19では、彼の一家の家は「ラマ」にあるとされている。これ以降、サムエルが帰る家は「ラマ」（サム上2：11、7：17、8：4、15：34、16：13、19：18）にあり、サムエルが葬られたのもラマであった（サム上25：1、28：3）と、頻繁に「サムエルの家＝ラマ」と言及される。

しかし、ラマはベテル、ミツパより南に位置し、両者と同じようにベニヤミン領に属する土地である（ヨシュ18：25）。したがってサムエル記上冒頭の「エフライム山地のラマタイム・ツォフィム」と同定することは困難となる。サムエルの一家がもともとベニヤミン領の「ラマ」にあったとすれば、サムエルはベニヤミン族である可能性も生じてこよう。仮に、のちに一家がラマに移住したのだとしても、少なくとも周囲のベニヤミン部族の民と密接な関わりがあったであろう。

サムエルの父エルカナの先祖はエフライム人ツフ（サム上1：1）だと明言されることから、サムエルもエフライム人であると一般に理解されるが、サムエルの出自はこのように曖昧に書かれている。<sup>14</sup> さらに、後代の歴代誌では、サムエルの一家は驚くことにレビ族に含められている。<sup>15</sup>

### ・サムエルの限定的な役割

サムエルにおいても、エリ同様、自身の息子たちから後継者は続かなかった（サム上8：5）。

結局、サムエルの生涯を通じての役どころは、主がイスラエルの指導的地位をエリの家（エフライム／レビ族）から取り上げ、一時的にサムエルに預けたのち、サウル（ベニヤミン族）と王として立て、さらにふさわしい王ダビデ（ユダ族）へと移すという媒介的役割に徹したことであった。

サムエルは、ベニヤミンの王サウルを最初の王として立てたが、まもなくこれを棄却し、次にダ

<sup>14</sup> もともとエフライムとベニヤミンには歴史的な緊密性があるとみられる（本論第5章のベニヤミンについての論考で詳述）。これは創世記のヨセフ物語で、ヨセフとベニヤミンがラケルを母とする兄弟とされることにも関連する。

<sup>15</sup> 歴代誌上6：12-13、17-20。

ビデに油を注いで王としたことで、最終的に(ユダ側に) 中立的～好意的な立場を与えられている。

王権について、サムエル自身は自分の息子の件には触れず、民が王を要求することそのものが主に対する悪だと考え、その考えは内心変わらなかったようである(サム上8:6、12:17-20)。

そんなサムエルの思いは前面に出ることはない。主が御心に敵わなかったサウル王を退けた時、サムエルは非常に悲しむが、再起してダビデを見出し、ダビデに油を注いだ(サム上16)。他方、主から見放されたサウルは、霊媒によってサムエルを呼び出し、伺いを立てた(サム上28)。サウルは自ら禁じた行為を行い、サムエルから恐ろしい言葉を告げられたのちに戦死してしまう。

### ・サウルとの関係の変化

ここでエフライム(ヨセフの家)とベニヤミンの関係性の変化についても触れておきたい。元来緊密であったと考えられる両者の関係は次第に変貌していく。どの時点でベニヤミンと、ヨセフの家を代表するエフライムの部族的な関係が逆転あるいは決裂するのかは明確ではないが、旧約テキストにおけるサムエルとサウルの関係の破綻がこの点について暗示的であると考えられる。

すなわち、「サムエルは死ぬ日まで、二度とサウルに会うことはなかった。サムエルはサウルのことと悲しみ、主はサウルをイスラエルの王としたことを悔やまれた」(サム上15:35)とある。

また、それに先行するサムエル記上15:11でも「サムエルは深く心を痛め、夜通し主に叫び求めた」とある。ここでは、罪のゆえに主に捨てられるサウルを拒絶しながらも、内心は深く悲嘆にくれるサムエルの心情が鮮明に描かれている。サムエルは、サウルのことを死ぬ日まで気にかけて、サウルの方も、サムエルの死後も霊媒によって彼を呼び寄せるほどに内心サムエルを信頼しており、彼に拒絶されたことを案じていたのであった。このような心情描写は、サムエル(エフライム)とサウル(ベニヤミン)の元来からの密接なる関係を抜きにしては説明できないであろう。

これと比較すると、サムエルとダビデの関係は非常に希薄である。心情的な接点はほとんど見られない。ダビデはサウル王からの逃亡中、一度だけサムエルのもとに身を寄せサウルの仕打ちを告げた(サム上19:18以下)のちには、一切サムエルを頼ることはなかったようである。サムエルの死(サム上25:1)に際しても、逃亡中のダビデが率先してサムエルのために何らかの行動をしたとは書かれない。サムエルとサウルとの濃厚で複雑な関係性に、ダビデ(ユダ族)は踏み込んでいない、という印象を読者は与えられるのである。

ユダ側から見れば、サムエルが北方部族に属しエフライムの祭司エリの家に仕えていたことと、イスラエルの王制導入には終始懐疑的であったという事情は、あまり歓迎されないことであつたのではないか。そのサムエルよりは、ダビデの王権に対する正当性や、その継続の永遠性を強く語る宮廷預言者ナタンの存在の方が、大きくクローズアップされることになるのである。

主の民イスラエルの指導的存在は、主の顕現とイスラエル12部族のアイデンティティーを象徴する「神の箱」の移動とともに、モーセから、エフライム(ヨシュア、シロ→サムエル)を経て、最終的にエルサレムに運び上げるダビデの元へと移ってゆく。彼らに伴う預言者もサムエルからナタンへと変遷するのを見るのである。裏返せば、イスラエル諸部族内部のパワーバランスの変遷は、

「神の箱」の移動に伴う護り人の入れ替わりに反映されていると見られる。

その過程においてユダ族の英雄（ヨシュアと同世代のカレブ、最初の士師オトニエル）らが、他の部族には見られない子孫と土地の継承の言及をもって突出して現れるのは、のちに台頭するダビデの家およびユダ族の首位主張の前触れであったと受け取れるのである。

## 第4章 ダンおよびマイナー諸部族について

### 1 ダンについて<sup>16</sup>

この章で取り上げるダンは、主要でないマイナー部族の代表であるが、謎めいており他部族にない特殊性がある。<sup>17</sup> もともとダン族は古くから祭儀と関わりがあり、ユダに並ぶ勢力もある主要な部族であったことを旧約聖書は証言している。しかし、ダンへの評価はやがて下降する。

ダンには「裁く」の意味があり<sup>18</sup>、ダン族は元来神祕的審判の担い手として特別な位置にあったであろう。「ダン」は、かつて主のような裁き手、祭儀と結びついた聖なる部族であり、ユダ族に近く位置し、ユダに次ぐ大きな規模<sup>19</sup>を持つメジャーな部族として位置付けられていたようである。

士師記 17-18 章の記事は、複雑で批判的な要素を含むが、ダンの最北の土地征服に言及するとともに、ダン族に固有の伝承とイスラエルの初期の祭儀の様子を記録し伝える。その中でダン族はエフライムの山地のミカの個人的な神殿祭儀の要素を取り去った。しかし、おそらく北王国ヤロブアム王への批判（ベテルとダンでの偶像礼拝）から、ダンの評価は急激に貶められたとみられる。

ダンは、嗣業の土地、パレスチナの「南」の定住に困難を抱えていたようである。その点を発端として、士師記 17-18 章に、北方のライシュ/ダンという土地への移住と、そのさいにエフライムの山地でのミカの家ヤハウエ祭儀がそのままダンに移動したという大きな二つの動きが記される。それは、ダンがユダ（南）を離れて、エフライム（北）へと政治的・祭儀的に移ったということかもしれない。

歴史的には、ダン族の北への移動はなかったのかもしれない、ただヤロブアムが興した「ベテルとダン」での聖所の祭儀のありかたが漸罪される時、同じ地名に絡めて士師記 18 章においてダン

<sup>16</sup> ダンについての論述は、拙論「イスラエル 12 部族をめぐる考察—ダンはどこへ行った？」（『伝道と神学』No. 7、東京神学大学総合研究所、2017 年）115-138 頁を参照されたい。

<sup>17</sup> ダンは、第一に族長ヤコブの息子として、第二にイスラエル 12 部族のうちのダンの部族（氏族）として、第三に「町」の名として登場する。この 3 つの側面を備えている部族は、12 部族中ダン以外にはない。

<sup>18</sup> ダンの名の由来（創 30 : 6）とされるヘブライ語動詞「ディン」 $\text{דִּין}$ （=judge, vindicate）は旧約聖書に 24 回の用例があるうち、17 回は主/神が主語である。「主が民を裁く」との意味合いの名をいただいたダン $\text{דָּן}$ は、そもそも神との関係が深かったことが想定される。創世記 49 : 16 のダンへの辞は、Bartusch によれば、「主がイスラエル部族を裁くように、ダンもイスラエルを裁くだろう」との解釈が可能である。Mark W. Bartusch, *Understanding Dan: An Exegetical Study of a Biblical Dan, Tribe and Ancestor*, JSOT Sup 379, Sheffield: Sheffield Academic, 2003, pp.34-39.

<sup>19</sup> 民数記 2 章、26 章における人口調査（各部隊の規模）では、ダンは 12 部族中ユダに次いで 2 番目に大きい。

族との結びつきが語られるようになったのかもしれない。聖書はそのあたりの事情を黙して語らない。そのためダンへの評価も曖昧にされる。謎に包まれたまま、ダン族は無言で消息を絶ち、総じてネガティブな印象を残す。歴代誌の系図にダン族は記されず、ヨハネ黙示録にもダンの名は登場しない。ダンは、イスラエル 12 部族の位置をひそかに外されるのである。

## 2 士師記 17-18 章の意義

ダンは歴史的には、他民族からだけでなく、おそらくイスラエル内部のエフライムやユダからも圧迫を受けていたとみられるが、元来民を裁く特別な役割を担っていたとみなされるこの部族についての証言を含む物語が、士師記 17-18 章において、おそらくダン族内部の伝承に基づいて構成され記録されたと考える。

このように、もともと高位であったダンは極端に下降する運命を与えられた。それは旧約聖書における隠された形での部族間の対立また神学的立場の違いの反映であろう。とはいえ、士師記 17-18 章は、北イスラエルの伝統的な祭儀のありようを伝える示唆に富む記録でもある。

その祭儀の特徴は、神々の像、エフォド、テラフィム、託宣などであり、北王国（ラケルグループ）に関係する。南ユダの立場からは批判的であろうが、カナン文化宗教が根強かった北イスラエルで、古代オリエントの風習やカナン主義と接近しながらも、ヤハウェ宗教を根付かせた過程である見ることができる。最初の主の民、出エジプトの民のように、はじめから律法の定め通りに振る舞えなかった祭儀における失敗を繰り返しながら、イスラエルは生き残っていったのだ。

ここに、過去の失敗を、批判としてではなく、教訓として後世に伝えようとしている著者（＝神）が読者と共にいることを知る。卓越した視点をもつこの著者は、その祭具の形式や祭司の資格などを問題にし、それらに頼ったり反対に批判したりする人間的なあり方を遠くから眺め、祭儀そのものや祭司の意味を深く問うているようにも思われる。ダンは、イスラエル 12 部族の中で、イスラエルのために、そのようなアンビバレントな役割を担わされたと言えよう。

## 3 その他のマイナー諸部族について

ここでは、本研究で特に章立てをしていない諸部族の消息に触れておくことにする。

いわゆるマイナー諸部族の状況を知るすべは、聖書テキストそのものにある。12 部族の序列に関わるヤコブの 12 人の息子の誕生物語（創 29 : 31-30 : 24, 35 ; 16-18）、諸部族に割り当てられた嗣業の地（ヨシュ 13-19 ほか）およびその他の個別の記述を手がかりに論じていく。

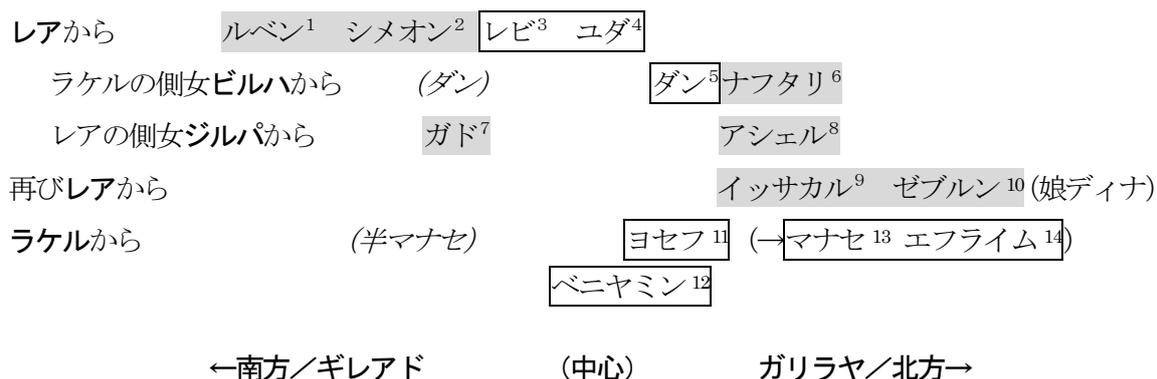
総じて、創世記のヤコブの息子たちの誕生物語は、中心でない周辺の土地（ギレアド、ネゲブ、ガリラヤ地方）を与えられた諸部族の歴史的事情と深く関連していることは明らかである。

まず興味深いのは、申命記 27 : 11-14 にあるモーセの命令により 12 部族の民が二分される記述である。民を祝福するためゲリジム山側に立つのは、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ヨセフ、ベニヤミン。民を呪うためにエバル山側に立つのは、ルベン、ガド、アシェル、ゼブルン、ダン、ナフタリと命ぜられた。前者にはユダ、レビ、ヨセフ、ベニヤミンの主要部族にユダと近いシメオ

ン、レビが加えられてポジティブに扱われ、後者のダンを含むそれ以外の非主要部族との区別を明白に示しているのである。

## 12 部族の相関図

創世記の誕生物語では、各部族の序列や扱いは上述の申命記の区別と若干異なる。ヤコブとの関係における母と出生順（右上番号）は以下の通り。



上記のように、息子たちの誕生の図式は、2人×6組（ないし7組）のペアとみなすことができる。なおかつ、本論で取り上げる□で囲んだ主要部族を中心に、網掛けで示したマイナー部族を左右に振り分けると、ちょうど左側は南方またはヨルダン川東岸のギレアド地方の諸部族、右側は北方またはガリラヤ地方の諸部族となり、中央を取り囲むように配置されているのが見て取れる。創世記の誕生物語は、各部族の地理的事情とその後の消息を反映した相関図的なものだと言える。

側女を母とするダン、ナフタリおよびガド、アシェルの4人は同列で下位に置かれる。

### ・ダンとナフタリ（母：ビルハ）

ダンは、前述の通り本来の主要な地位から急激に下降する運命をたどった。それが誕生物語において、ラケル系の第一子であるが、母は側女という位置付けを与えられた理由であろう。

ナフタリ<sup>20</sup>は、地理的にはガリラヤ湖の西側に位置し、北端のダンの地と隣接する。ナフタリを含む北方の住人はその後アッシリアに北イスラエル王国が滅ぼされる際、ニネベの捕囚となったとみられる。外国人の移住や混交も行われ「ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けた」（イザ8:23）ゆえ、「異邦人のガリラヤ」と呼ばれるが、新約の時代において実現する栄光を受ける。

### ・イッサカルとゼブルン（母：レア）

<sup>20</sup> ナフタリ נַפְתָּלִי の名には「わが闘い」の意義があり、デボラの戦いに参加し（士5:18）、ギデオンの呼びかけにもゼブルン、アシェルと共に合流し（士6:35）、ミデヤン人の追撃に加わった（士7:23以下）。ナフタリ族の母、ティルス人の父を持つヒラム（王上7:13以下）がソロモン神殿の備品制作を担当した。その他、ナフタリについて言及は多くないが、旧約外典「トビト記」のトビトはナフタリ族出身とされる。

レアから生まれたとされるこの2部族もガリラヤ地方の部族である。女預言者（指導者）デボラはイッサカル<sup>21</sup>族とみられ（士5：15）、また、士師トラがイッサカル族である（士10：1）。

また、イッサカル族のバシヤは、ヤロブアム（エフライム人）の子ナダブ王に謀反を起こして北イスラエルの王となり24年間統治、その息子エラも2年間王位についた（王上15：25-16：8）。バシヤはヤロブアム家を滅ぼしたのに、結局彼の罪を継承したとしてネガティブに書かれている（王上15：34、16：7）。概して北イスラエル王国の罪の元凶はヤロブアム王の犯した罪（王上12：25以下、13：33-34）に集約されるが、バシヤも「ヤロブアムを討ったため」（王上16：7）に、主の怒りを招く手の業と行ったと断罪されるのである。このように、イッサカル族からの王が二代続いたことが、ポジティブな評価を受けていないことはかえって注目に値する。ただ、申命記27章で、イッサカルだけがマイナー部族の中で唯一ゲリジム山の祝福側に置かれた。

ゼブルン<sup>22</sup>について、この部族を代表する人物としては、士師エロン（士12：11）および、ゼブルンの領地ガト・ヘフェルの出身の預言者ヨナ（王下14：25、ヨシュ19：13）が挙げられる。

#### ・ガドとアシェル（母：ジルパ）

アシェル<sup>23</sup>族は、カルメル山の北に広がる地中海に面した肥沃な地を与えられた部族で、聖書では最も言及が少ない部族である。割り当て地は、ティルス、シドン、アッコ（ウマ）などを含むとされる（ヨシュ19：24以下）が、これら海沿いのカナンの強固な町にはフェニキア人が住んでおり、アシェル族が占領できたということはおそらくなかったであろう（cf. 士1：31-32）。これらは交易の場であり（cf. イザ23）、ソロモン王の時代、神殿建設にあたりティルスの王ヒラムと条約を結び友好関係を築いた（王上5：15以下）時期もあった。しかしアシェル族はカナンの先住民の勢力につねに押されていたはずで、王国分裂以後はさらに力を失い、やがてアッシリア帝国に呑み込まれていったとみられる。アシェルはダンと同様、海沿いの開けた地を割り当てられたゆえの困難を強いられた。<sup>24</sup>

他方、ガド<sup>25</sup>は、死海とガリラヤ湖を南北に結ぶヨルダン川の東側全域に嗣業の地を割り当てられた部族である。ガドの領地の南方には、ルベン族の土地がある。北側はギルアド地方であるが、ガドとギルアドはしばしば重ねられる（ヨシュ13：25、士5：17）。

ヨルダン川東岸の地域は、モーセによってまずルベン、ガド、半マナセに与えられたとされる（ヨシュ13）が、この地域一帯は早くからアンモン人やモアブ人からの圧迫にさらされ続けた。その様子はギルアド人の士師ヤイルや特にエフタ（士11）の経験として記されている。

<sup>21</sup> イッサカル  $\text{יִשָּׂשכָר}$  ( $\sqrt{\text{שָׂכַר}}$  : to hire) の名には「彼は報いを得る」との意味がある。

<sup>22</sup> ゼブルン ( $\text{זְבוּלֹן}$  または  $\text{זְבוּלֹן}$  :  $\sqrt{\text{זָכַר}}$  : to honour) の名は、「尊敬を受ける」といった意味を帯びる。

<sup>23</sup> アシェル  $\text{אַשֶׁר}$  ( $\sqrt{\text{אַשַׁר}}$  : to go straight) の名には、「まっすぐ歩む、祝された、幸いな者」といった意味がある。

<sup>24</sup> なお新約聖書ではアシェル族の女預言者アンナが登場し、神殿において老シメオンと共に幼子イエスに会えたという幸いが記されている（ルカ2：36）。

<sup>25</sup> ガド  $\text{גָּד}$  の名の由来は、おそらく「幸運」( $\text{גַּד}$ ) である。

ヨルダン川東部はもともと、アンモン人、モアブ人、エドム人の居住地であった。これらセム系民族は、創世記ではイスラエルの親戚関係とされ、イスラエルに従属した時期もあった。そうした関係のあるギルアド地方・東岸地域を与えられた半マナセ、ガド、ルベンは、歴史的に古い部族・氏族であろう。いずれも各母親の第一子とされる所以はそこにある。

しかし、この東岸地域の歴史的に不安定な事情のためにこれらの部族も栄えることはなかった。アッシリア帝国に占領された後、再びアンモン人やモアブ人が占拠する地になった。不利な地理的要因ゆえに、ヨルダン川東岸地域は、イスラエルの政治的中心であったことは一度もない。これらの部族はヨルダン西側に本拠地を置くイスラエルの中心勢力（エルサレム、サマリア）の政治的影響下にも置かれていたのである。

### ・ルベんとシメオン（母：レア）

レアがヤコブに産んだ長子ルベんと第二子のシメオンについては、第2章、第6章などでレビやユダとの関係において触れており、ここでは簡単に述べるにとどめる。

ルベן רַבֵּן は “behold a son!”（ご覧ください、息子です！）との名の由来のように、レアが誇らしげに生んだヤコブの長子である（創29：32）。もともとの地位は高かったが、ルベンに関する否定的なエピソードがあり（創35：22、49：3-4）、実質的な長子の権利を失っていく。地理的にはルベン族は、ガド族領地の南、死海の北東部に広がる地域を与えられた。士師記5章のデボラの歌に、家畜の中に止まって出陣しないルベンの様子が言及される（士5：16、17）ことから、古くからイスラエルに存在したが、好戦的でなかった部族であることが窺われる。ルベン族出身の士師、指導者および特定の個人についての記事はなく、ルベン族は早いうちに勢力を失っただろう。しかし、ルベンの歴史の古さと、死海をはさんでユダと隣接する地理的要因が重要視された。それゆえ、ルベンのヤコブの長子としての名は保たれ、ユダと同じくレアの系譜とされたのであろう。

同じように第二の息子シメオンもユダとの関係が深い部族と言える。シメオン שִׁמְעוֹן (שמעון = to hear) は、早い段階でユダに吸収された部族と見られる。ヨシュア記19：1-9によれば、シメオン族の相続地は、ベエル・シェバ、ホルマを含むネゲブ地方で、南方ユダの相続地の間にある。ユダの割り当て地が大きすぎたため、シメオンの一族が共に受け継いだのだとされる。シメオンとレビは、ユダの兄として位置付けられており、ユダよりは歴史は古いが、実質的に固有の領地がない、あるいは持たなくなったペアと言える。シメオン族出身の個人は、特に見当たらない。

士師記5章のデボラの歌に名が記されないのは、シメオン、レビ、ユダである。その理由については議論がある。これらの部族は当時、存在していなかったか、「イスラエル」に属していなかったかのどちらかである。いずれにせよ、レア系のルベン、シメオン、レビの位置付けは、ユダとの関係の近さによることは確かであろう。(みやぎき・かおる)

\*この論文は『伝道と神学』No.14、東京神学大学総合研究所、2024年、175-197頁に掲載されたものを、一部訂正の上、公表するものである。

# 「旧約聖書におけるイスラエル12部族の歴史の変遷と陰影」～後編～<sup>1</sup>

宮寄 薫

## 第5章 ベニヤミンについて<sup>2</sup>

この章で論じるベニヤミンは、第4章で論じた消失させられた部族ダンとは対照的に、歴史の変化の中で、変貌しつつも上昇する部族としてイスラエル12部族の中核をなしていったと考えられる。ベニヤミンに関する旧約聖書諸文書を通して、様々な角度からこの主要部族の分析を試みる。

### 1 ベニヤミン族の特性

ベニヤミンは、イスラエル12部族の中において特殊で、かつ最も重要な部族の一つである。創世記ではベニヤミンをもってヤコブの12人の息子が揃う。しかしながら、旧約聖書全体においては、ベニヤミンは中心的存在というよりは、文字通り北と南との間の中間的な立ち位置に押しとどめられている感が否めない。まずは旧約聖書におけるベニヤミンにまつわる特徴を分析し、ベニヤミンがどのように扱われているかを探り、その理由についても考察していく。

#### 1) 起源 地理的特性

イスラエル12部族の中でのベニヤミンの位置付けには、地理的な特性が大きく影響している。ベニヤミンの部族領はイスラエルのほぼ中央に位置し、北側はエフライム、南側はユダの境界線に挟まれた中心部にあることが、この部族の特殊な運命を決定づけた大きな要因と言える。

ベニヤミンの歴史的起源は不明な点が多いが、旧約聖書に記される部族の名前と領土、諸部族との関係からある程度の推測がなされうる。

Schunck は、ベニヤミン בִּנְיָמִן の名の意味は「右手側の息子」あるいは「南の息子」であるとし、右手あるいは南側にいる別の地理的／民族的存在との関連において地理的視点から表した名称であるとし、「最もありそうなのは、ベニヤミン部族とまさにその北に位置する強力な部族エフラ

<sup>1</sup> 本論文は博士学位論文の一部を公表することを目的とするものである。（「旧約聖書におけるイスラエル12部族の歴史の変遷と陰影」、2024年4月30日、東京神学大学博士（神学）乙第12号 学位授与。主査：小友聡東京神学大学教授、副査：左近豊青山学院大学教授、副査：田中光東京神学大学准教授）。本論文は、博士学位論文の第5章「ベニヤミンについて」、第6章「ユダについて」を中心とする内容であり、ここに掲載するために内容を要約したり書き改めたりしたところがある。

<sup>2</sup> ベニヤミンについては、拙論「旧約聖書に隠された部族間の相剋—ベニヤミン問題をめぐる考察—」（『伝道と神学』No.5、東京神学大学総合研究所、2015年）および「歴代誌におけるベニヤミン族の位置付け」（『伝道と神学』No.11、同、2021年）も参照されたい。

イムとの密接な関係を示しているのではないか」と述べる。<sup>3</sup>

ドゥ・ヴォー (R. de Vaux) は、「ベニヤミン部族は、共に入った他のグループ (エフライム) の南にとどまった。エフライムは彼らが定着した地の名前を取ったのであり、このことはベニヤミンの部族が定着後に部族として形成されたことを前提とする」と説明する。<sup>4</sup>

Schunck はベニヤミンとエフライムの氏族間に軍事的連合としての緊密な関係があったと推測し、カナン定着後、ベニヤミンとエフライムの領地は分割されたが、その境界線付近の、古い祭儀場のあったギルガルにヨシュア (エフライム人) が最初のヤハウェの聖所を建てた (ヨシュ 4-5) ことが、両者の関係を立証すると述べる。<sup>5</sup>

デボラの歌 (士 5 : 14) もエフライムとベニヤミンの近しさを示していると言えよう。

ベニヤミンは、部族集団も領土もエフライムに比べて小規模ではあったが、小規模でも攻撃的で軍事的に強力な集団であったことが推測される。

## 2) 創世記に描かれるベニヤミン

前述したようなベニヤミンとエフライムとの間に元来密接な関係があった痕跡は、創世記のヤコブの子らの誕生物語に見られる。ヨセフとベニヤミンは同じ母を持つ兄弟として描かれた。ヨセフの名はもう一人の男子を得ることを願って付けられた (創 30 : 24)。ベニヤミンの誕生と引き換えに母ラケルは死ぬが、それを境に物語の主役はヤコブから、ベニヤミンを加えたヤコブ (イスラエル) の 12 人の子らへと移ってゆく。この流れにおいても、12 人 (部族) から成るイスラエル共同体にベニヤミンが存在することの必要性が表現されている。また、初段階ではヨセフとベニヤミンが一体となって他の兄弟と相対している姿が描かれていると言える。

創世記においてベニヤミンは、被保護役的立場に置かれ、父ヤコブからも兄ヨセフからも特別な扱いを受けている (創 43 : 34)。だが、ベニヤミンは創世記を通して終始無言であり、特に「ヨセフ物語」において非常に抑制されて描かれている。おそらくこれは、ヨセフ物語において水面下で進行しているテーマが、ベニヤミンの保護的役割がヨセフからユダへと移ることであるため (第 6 章を参照)、ベニヤミンは中立的で受け身の状態に描かれているのだろう。

もしそうであるなら、その理由や背景には何があるだろうか。

<sup>3</sup> Klaus-Dietrich Schunck, *Benjamin: Untersuchungen zur Entstehung und Geschichte eines Israelitischen Stammes*, Alfred Töpelmann, 1963, pp.4-5. -ABD vol.1, trans. Phillip R. Callaway, p.671.

<sup>4</sup> R. ドゥ・ヴォー著、西村俊昭訳 『イスラエル古代史 起源からカナン定着まで』、日本基督教団出版局、1977 年、872-3 頁。ドゥ・ヴォーは、ヨシュア記 1-9 章の物語はベニヤミン伝承に帰せられているとする。

<sup>5</sup> Schunck, op.cit., p.671. Schunck は、これら (エフライムとベニヤミン) の氏族は前 12 世紀少し前にヨルダン川の東から来てエリコに進み、ルズベテルとエルサレムの間の小さな土地に入ったと見る。

この章でも後述するが、歴史的変遷の中で、ベニヤミンは元来ヨセフの家（エフライム／北王国）と関係が深かったが、のちにユダ（南王国）に組み込まれ、協力させられる形で存在していった。

6 ヨセフ物語におけるベニヤミン自身の弱さやあいまいさの表現は、そのような揺れ動きの事実はベニヤミン自らの身勝手な決断によるものでなく、部族間の複雑な歴史的変動によるものであることを、特にその当時の対象読者（ベニヤミン、イスラエル、およびユダの人々）に向けて示したい意向があったからではないだろうか。<sup>7</sup>

ヨセフ物語の核は北王国にあったとしても、これをまとめ上げたのは、おそらく北王国崩壊前後に、南のベニヤミン領かユダ領に避難し移動してきたレビ人あたりであろうと筆者は推測する。

### 3) イスラエルの中のベニヤミン

創世記を除くと、五書では、ベニヤミンについての記述は中立的である。ベニヤミンに属する個人または集団が特筆されるのは、主として士師記、サムエル記である。なかでも最も特筆すべきは、士師記の枠に収まらない士師記 19-21 章である。

士師記 19-21 章の解釈には様々な議論があるが、ベニヤミン部族がネガティブに書かれているとの見方は一致している。Giffone は、「士師記 19-21 章の中でどの個人どの部族がポジティブに描かれているか見極めるのは難しいが、ユダがイスラエルのリーダーとして示されている」と述べる。

8 彼は、前後に置かれた「イスラエルには王がいなかった」（士 19 : 1、21 : 25）との言明は、正しい王がいなかったため、イスラエルはソドムより酷い状態で、同族の一つの部族に対する殲滅戦争を遂行し、一民族の根絶とレイプ事件に対処するためにさらなるレイプと計画された民族の根絶の連鎖が生じるほどだった、というメッセージである、と捉える。<sup>9</sup>

6 ただし、これはサウルの死後、イスラエルとユダが争う中で武将アブネルが個人的にダビデに付いたのが発端であり（サム下 2 : 8-3 : 30）、当時のベニヤミン族でサウル王家に付く者の中には反発もあった（サム下 5 : 5-8）。その後の歴史では、北王国の滅亡前後に、逃れてきた北の諸部族を南のベニヤミンやユダの地で多く受け入れた経緯があったことが想定される。

レヴィンは、「今日の『士師記』から『列王記』までの諸書の背後には、いくつもの集成や連作が存在している。それらの物語の大多数は、北王国起源のものである。前 722 年にアッシリアがサマリアを征服した際に、それらのテキストは、逃げ延びた宮廷人によってユダにもたらされたにちがいない。そうでなければ、それらの物語がそもそも保存され、前 6 世紀以降になってから、成立しつつあった旧約聖書に取り入れられたわけが説明できない」と述べている。-C. レヴィン著『旧約聖書—歴史・文学・宗教』山我哲雄訳、教文館、2004 年、53 頁。

7 もしそれが正しいなら、ヨセフ物語の最終形態の成立は、どんなに早くとも北王国滅亡前には考えられない。ヨセフ物語の大部分の著者は J（ヤハウィスト）または E（エローヒスト）とされるが、ヨセフ物語は北方部族の祖であるヨセフの人生に焦点を当てると同時に、イスラエル全体を統べる力と責任を帯びてゆく主体がユダに委ねられていく様子も埋め込まれている（第 6 章を参照）。

8 Benjamin D. Giffone, "Sit at My Right Hand": The Chronicler's Portrait of the Tribe of Benjamin in the Social Context of Yehud, T&T clark, 2016, pp.143.

9 ibid.

このような「王の不在」の枠内で書かれるのが、士師記 19-21 章である。先行する士師記 17-18 章にも同じく「そのころ、イスラエルには王がいなかった」（士 17:6、18:1）との枠があるが（士師記 17-18 章については第 4 章で触れた）、二つの話は別々のものと考えられる。<sup>10</sup>

にもかかわらず士師記 17-18 章と 19-21 章は「王がいなかった」（士 17:6、18:1、19:1、21:25）状況を伝え、「そして、おのおのが自分の目に正しいと思うことを行っていた」（士 17:6、21:25）という言葉で締めくくるのである。この作られた枠組みは、構造上次の二つの役割を果たしていると考えられる。すなわち、i) 士師記と後続するサムエル記をつないで、士師が裁く時代から王が国民を治める時代への移行を導く。ii) 士師記 19-21 章と士師記 17-18 章との連続性を持たせ、二つの話を士師記の補遺として同列に置く。<sup>11</sup>

しかしながら、士師記 19-21 章に記されるベニヤミン族の悪行、その結果もたらされたイスラエルの内戦と和解的解決といった内容と、全体の枠として掲げられている「イスラエルに王がない」状況とがどう結びつくのかという点の議論は未解決のままである。

同様に、士師記 19-21 章の書かれた時期についても議論がある。

Blenkinsopp は、他の聖書記事の並行箇所と、この話にベテルとミツパが目立つことに基づくと、バビロニア時代またはペルシア時代初期が最もふさわしいとみる。<sup>12</sup>

士師記 19-21 章の内容からみても、これが士師時代と王国時代の間起きた史実を伝えたものである可能性はほぼない。もしそうならサムエル記などの記述内容との間に重大な矛盾が生じてしまう。<sup>13</sup> レヴィンが述べたように（注 6 参照）、士師記 19-21 章は北イスラエル王国の古い伝承に基づく資料がのちにユダでまとめられた可能性、時期としては Blenkinsopp の指摘するように捕囚後に成立した可能性が高いということは言えよう。

しかし、ベニヤミン族についてかなりネガティブな士師記 19-21 章がなぜ収録されているのか。

<sup>10</sup> 第 4 章を参照。士師記 17-18 章と 19-21 章は、構造および表現上似ている点はあるが、本来はまったく異なる物語が同列に置かれたものである。

<sup>11</sup> この ii) に関しては、Krisel が主張しており、「王の不在」および、主人公の「レビ人」の設定は、士師記 17-18 章に士師記 19-21 章を同様に補遺として位置付けようとする最終的な編集者の手によると説明している。-William Krisel, *Judges 19-21 and the "Othering" of Benjamin: A Golah Polemic against the Autochthonous Inhabitants of the Land?*, Brill, Oudtestamentische Studiën v. 81, 2022, pp.238-43.

<sup>12</sup> Joseph Blenkinsopp, "Benjamin Traditions Read in the Early Persian Period," in Lipschits and Oeming, eds., *Judah and the Judeans in the Persian Period*, Winona Lake: Eisenbrauns, 2006, pp.642-3. 捕囚期に荒廃したエルサレムに代わって、ほとんどダメージを受けなかったベニヤミン領のベテルとミツパが、宗教的・政治的中心地となっていたことはほぼ一致した見解となっている。

<sup>13</sup> たとえば、士師記 19-21 章によれば、ベニヤミン族は殲滅寸前にまで追い込まれ、そのうち女性は全滅したので、その後のベニヤミンの子孫の母方は、ヤベシュ・ギルアドの処女カシロの娘に限定されるが、そのような痕跡は旧約聖書の中に見出されない。また、ヤベシュ・ギルアドの住民は処女 400 人を除いて全滅したのが事実なら、後のサムエル記（サム上 11:1-10、31:11-13、サム下 2:4b-7、21:12-14）にあるように、ヤベシュ・ギルアドの住民が登場しサウルとの関係が伝えられるはずもないのである。

この問題を考察する前の手がかりとして、サムエル記上に登場するベニヤミン族出身の王サウルについて以下に論じていきたい。

## 2 ベニヤミン族の王サウル

### 1) サウルの王位とその評価

サムエル記上 9-31 章に描かれるサウルに対しては、罪を犯して主に捨てられた悲劇の王、ダビデの引き立て役、などとネガティブに評価される傾向がある。こうしたアンチ・サウルの傾向は、ダビデに対して好意的なプロ・ダビデの傾向とセットで論じられることが多い。しかし最近のサムエル記研究において、サウルを再評価する研究や、サムエル記の著者はサウル、ダビデに対してバランスを取っているとの見方も出てきている。

サムエル記上 9-15 章において、サウル王が即位し戦果を上げたことは、複雑な記述ながら史実に基づくものであろう。しかしサウルは、主への献げ物と聖戦に関する決定的な過ち（サム上 13 : 8-14、15 : 8-23）のゆえに退けられ、ダビデと入れ替わるように下降していった。登場人物の浮沈は、主に対する個人の姿勢や行いによって決定付けられているように記される。

しかし細部をみると、サウル王の場合は明らかに、ユダの王たちに対する主の寛容さとは対照的な厳しさがある。<sup>14</sup> 主の期待を裏切ったサウルはただちに王として無効化され、それはサムエル記上 15 章で決定的となる。そして 16 章以降に登場するダビデが新たに見出される流れとなる。

こうした章の配置のしかたからも読み取れるのは、“ダビデは決してサウルを出し抜いて王位を奪ったのではない”、“サウルは自らの不信仰のゆえに自滅したのだ”という点の強調である。

そのように早い段階で廢位が決定的となるサウルの王位はどのように与えられたのか。

サウルの即位の記述は3通りある。

i) ラマで、サムエルが密かに油を注ぐ（サム上 9 : 1-10 : 16） ii) ミツパで、サムエルの立会いのもと、くじによって選び出される（同 10 : 17-27） iii) 対アンモン人戦の勝利後、ギルガルで民全体によって選ばれる（同 11 : 14-15）

どの伝承が最も古く、どの部分が歴史的かについては議論がある。<sup>15</sup>

<sup>14</sup> 例えば、ダビデの倫理的過失に対して（サム下 11-12 : 25）、ソロモンの背信に関して（王上 11 : 1-13）、主が即座に王位剥奪を言い渡すことなどはなかった。

<sup>15</sup> 例えば、ヘルツベルグは、このような伝承が、複数の異なる形で伝えられている理由は、「単純にサウルが王になった次第について、個々の聖所でそれぞれ異なる固定した伝承が伝えられていた、ということなのである」とする。→H・W・ヘルツベルグ著、山我哲雄訳『ATD 旧約聖書註解6 サムエル記上1章-下1章』、ATD・NTD 聖書註解刊行会、1996年、163-8頁。また、Brooksは、くじで選ばれ、サウルが王として公認されたのがおそらく最古であると推測し、その上で対アンモン人戦に勝利したサウルの評判が彼の王位を確

Brooks は、イスラエルはサウル以前にも王制を試みたことがあったと指摘する。士師記のギデオンの、その息子アビメレク（マナセ族、士 8-9）、エフタ（ギルアド人、士 11）がそうであり、その後も「40年間イスラエルを治めた」（サム上 4 : 18）シロの祭司エリがその例であるとする。<sup>16</sup>

たしかに、エリはおそらくイスラエルの政治的・宗教的な指導者であったと考えられるが、祭司になったエリの二人の息子たちは滅んでしまい（サム上 4 : 11-17）、エリの家を継ぐことができない。同様のことはサムエルの二人の息子たち（サム上 8 : 1-2）の上にも起こる（同 5 節）。第 3 章で述べたように、エリもサムエルもイスラエル全体の指導者として一代限りであった。ギデオンも王になってほしいとする民の要求に応えなかった（士 8）経緯がある。

そのような前段階を経てのサウル王の誕生に関して、他部族からの反応はどうだったのだろうか。特に、ベニヤミンよりも格上で「兄」に当たるエフライムからやっかみや反発はなかったのだろうか。少なくともエフライムが無関心だったとは考えにくい。

その観点において、エフライム人でもあるサムエル（第 3 章で詳述）の言動も微妙である。

サウルの即位の i) において、サムエルは、当初からイスラエルの王制に否定的であった（サム上 8 : 6）が、自分の意には反するものの、主に従ってサウルに油を注いだ格好である。

ここでは、サムエル自身が、王制（≒サウル）に対する否定と肯定の間でバランスを取らされているのである。サウルを王とすることに深く関与したサムエル自身のアンビバレントな姿勢がこのように初めから明かされていることは注視すべきである。

実際に、サウルのカリスマ性や、士師のように外敵から守る軍事的強さは、民に歓迎されたのであろう。その一方で、主のみを主権者とするイスラエルの神学的立場から、王制導入に否定的な人々がいたことは当然である。Brooks が指摘するように、イスラエルの王制に対する反発は、預言者ホセア（ホセ 8 : 4、10 : 3、15、13 : 10-11）において顕著に示されている。<sup>17</sup> Brooks は、「サウルが否定的に描写される理由は、彼が正気でなかったとか弱いリーダーであったからなどではなく、彼が最初の王であったからだ。さらにサウルへの批判の多くをテキストに挿入したのは、ダビデの行動の正当化を目指したプロ・ダビデの編集者だけでなく、神学的メッセージを伝えるためにサウル像を用いた預言者集団もそうであった。後に、サウルは北王国を代表したためにさらに否定的なプロパガンダの主体となったのである」と述べている。<sup>18</sup>

---

かにしたため、ギルガルでその即位が祝われたのであろうと見る。-Simcha Shalom Brooks, *Saul and the Monarchy: A New Look*, Society for Old Testament Study, Routledge, 2005, pp.48-9.

<sup>16</sup> *ibid.*, p. 47.

<sup>17</sup> *ibid.*, p. 46.

<sup>18</sup> *ibid.*, p.178. Brooks はここで、サウルは北王国を代表したと述べている。しかし、サウルは全イスラエルの王であって、分裂後の北王国の代表はヤロブアム（エフライム人）に帰せられるのが正しいだろう。統一王国

Brooks の指摘が正しいなら、サウル個人が全否定されたわけではないということである。

また、ダビデ・ソロモンの統一王国の黄金期には、イスラエルの王制批判者もいなくなり、アンチ・サウルを唱える必要性もなくなったと考えられる。

それでもアンチ・サウルを掲げる必要があったのなら、それは歴史的に、まだサウル自身が力を持っていたか、サウル王家を支持する層の勢力が一定以上あった時に、サウルに否定的な考えを持つ人々がいたということだ。それらの人々とは、これまでは一般にプロ・ダビデの人々（ユダ側）、もしくは王制そのものへの反対派であると考えられていた。しかし実際は、イスラエル内部とりわけエフライム族のうちに、ベニヤミン族から最初の王が出たことへの反感が少なからずあり、それが滲み出たと考えてもおかしくないのではないか。

## 2) サウル王の統治と戦果

そのサウル王の統治はどのようなものであったか。サムエル記上 13 : 1 において MT (マソラ・テキスト) ではサウル王の即位の年齢は欠けており、統治年間も不明瞭な書き方であるため、翻訳は様々であるが、聖書協会共同訳は「サウルは 30 歳で王位につき、12 年間イスラエルを統治した」と訳出した。<sup>19</sup>

これが史実に近いとすれば、サウル王の治世は短命だったとは言えない。サウル王の戦死後、息子イシュ・ボシェトが 2 年間王位にあった (サム下 2 : 8-10)。サウル王の王権は、確かに父子二代に及んだのである。<sup>20</sup> サウル王の死後も、イシュ・ボシェトを擁立したサウル王家と南ユダの王となったダビデ家の戦いは長く続いた (サム下 3 : 1) とあり、次第にダビデ家の勢力が増していくが、イスラエルがサウル家に仕える姿勢は根強く残っていたとも考えられる。

実際に、ベニヤミン部族自身もおそらくサウル王の死後、サウル側とダビデ側に分断されていたのではないだろうか。地理的にも北 (エフライム) と南 (ユダ) の中間に位置するため、ベニヤミンの人々は政治的にも南につくか北に残るかの選択を絶えず迫られていたであろう。

これと同時に、エフライムを中心とする北のイスラエル諸部族の人々も、サウル王の治世以来、イスラエルは誰を支持するか、誰がイスラエルの指導者として立つべきかを巡って、水面下の動きが活発にあったであろう。実際、ソロモン王の死後、ヤロブアムが自分の王国を建てた。この時、

---

が分裂した原因もサウルではなく、ソロモンにあったとされる (王上 11)。

<sup>19</sup> 新改訳も同じ。新共同訳は「サウルは王となって 1 年でイスラエル全体の王となり、2 年たったとき」。口語訳は「サウルは 30 歳で王の位につき、2 年イスラエルを治めた」。

<sup>20</sup> 前述のように、それ以前のエフライム族出身の指導者は一代限りだった。ただ、ダビデへの油注ぎ (サム上 16 : 13、サム下 2 : 4) とは対照的に、ここでイシュ・ボシェトへの油注ぎの儀式は記されていない。

エフライム部族からの初めての王が誕生し、シロのアヒヤの預言通りにベニヤミン族を含めた十部族をもって「全イスラエル」を支配したのである（王上 11 : 35-37）。

### 3) サウルとヤベシュ・ギルアドの関係

サウルの治世は士師時代同様、近隣の諸民族との戦いが絶えなかった。サウルの統治と近隣住民との関係を考える上で非常に重要と思われるのが、ヤベシュ・ギルアドとの密接な関係である。

ヤベシュ・ギルアドはヨルダン川東岸の町で、サウル（ベニヤミン）との関連でたびたび言及される（士 19-21、サム上 11 : 1-10、31 : 11-13 ; 代上 10 : 11-12、サム下 2 : 4-7、21 : 12-14）。

Cross は、クムラン文書（4QSam<sup>a</sup>）の分析を通して、ルベンやガドのヨルダン川東側の 2 部族が先住民族のアンモン人に圧迫されていたことを指摘した。<sup>21</sup> Cross によれば、MT では省略されていたその文書は、サムエル記上 10 : 27b を置き換える形で 10 章と 11 章の間の長い付加を含む。

<sup>22</sup> その 4QSam<sup>a</sup> の内容によると士師記 11 章（エフタの時代のイスラエルとアンモン人の衝突）におけるアンモン人ナハシュは、東部部族のルベン族およびガド族を相当圧迫して消滅させたか隷属させた可能性がある。その際、生き延びたルベンとガドの 7 千人の兵士は、ギルアドのヤベシュに逃れてきた。しかしそこにもナハシュは攻めてきて、町を包囲し（サム下 11 : 1）、彼らを支配下に置こうとしたのであろう。それがサム下 11 章の内容とみられる。

その時ナハシュは、ヤベシュ・ギルアドの「全員の右の目をえぐり出すこと」を契約の条件とした（同 11 : 2）が、彼らは 7 日間の猶予をもらい救いを求めたところ、サウルが全イスラエルに緊急出陣命令を出し、アンモン人を討った。その後、民はサウルを王とした（同 11 : 5-14）という。

しかしここで、2 日でサウルがユダを含む全イスラエル（サム上 11 : 7-8）<sup>23</sup>をもって挙兵し、アンモン人戦に勝利したという内容に誇張があることは否めない。この時サウルがナハシュを討った

<sup>21</sup> F. M. Cross, "The Ammonite Oppression of the Tribes of Gad and Reuben: Missing Verses From 1 Samuel 11 Found in 4QSamuel", *History, Historiography, and Interpretation: Studies in Biblical and Cuneiform Literatures*, (eds.) H. Tadmor, M. Weinfeld, The Magnes Press, Hebrew University, Jerusalem, 1984, pp.148-58.

<sup>22</sup> *ibid.*, pp.148-9. 4QSam<sup>a</sup> の 10 列 6-9 行は、以下の通り。「そして、アンモン人の王ナハシュが、ルベンの子らとガドの子らを激しく圧迫した。そして彼は彼らの右の目をすべてえぐり出し、イスラエルに恐怖を与えた。ヨルダンの向こう側のイスラエルの子らはナハシュに右の目をえぐられなかった者はなかった。男 7 千人のみが、アンモン人から逃れてヤベシュ・ギルアドにきた。約一月後、アンモン人ナハシュは上って来てヤベシュ（・ギルアド）を包囲した。そしてヤベシュの男たち全員が（アンモン人）ナハシュに『我々と契約を結んでください。我々はあなたに仕えます』と言った。（アンモン人）ナハシュは『では、この通りにしてから、お前たちと契約を結ぼう…』と彼らに言った」（私訳）。

<sup>23</sup> D. Edelman は、「ユダという部族は、ダビデ以前にはおそらくまとまった地に存在していなかった。ここで、特にユダが部族召集時に挿入されているのは、12 部族で構成される統一体としての王国時代前のイスラエルの後代の理想化に起因する」と述べる。-Diana Edelman, "Saul's Rescue of Jabesh-Gilead (1 Sam 11:1-11): Sorting Story from History", *ZAW*96, 1984, p.206.

という報告もない。Edelman は、この記事はサウルを、イスラエルを救い出すカリスマを帯びた大士師とみなし、「主の恐れ」を呼び起こし、全イスラエルを挙げて聖戦が行われたとする虚構であるとし、この編集の手は、サウルを王ではなく「士師」のスタイルとみなして貶めることでダビデを浮き上がらせる意図を持ったプロ・ダビデのものと想定する。<sup>24</sup>

しかしそうであれば、そのあとすぐ民がサムエルの呼びかけでギルガルへ行き、そこでサウルを王とした（サム上 11：14-15）という記事が続いている理由がよく説明できない。

むしろ、サウルを伝統的にイスラエルの指導者的立場の「士師」と同列にみなしたかったのは、実際にサウルの後に王を出したユダ（プロ・ダビデ）よりは、身近にいる隠れたアンチ・サウル、すなわち先に王を出せなかったイスラエル側のリーダー、エフライムであるとみなすほうが、蓋然性は高いのではないだろうか。

この時以来、サウルとヤベシュ・ギルアドとの間に軍事的な同盟関係が結ばれたのか、あるいはそれ以前に個人的なつながりがあったかどうかは分からない。いずれにせよ、この後もサウル／ベニヤミンと、ヤベシュ・ギルアドとの密接な関係性はしばしば言及され、とくに士師記 19-21 章において明瞭にしかも批判的に表現されているだけに、両者の関係は重要である。その後のダビデも両者の結びつきを非常に気にかけている（サム下 2：4b-7）点も注目される。

#### 4) ギルアドとエフライム

士師記 11：1-33 にギルアド人エフタがアンモン人と戦い屈服させた記事がある。これに関連して興味深いのは、士師記 12 章において、エフタの対アンモン人戦の時に声をかけられなかったとして抗議したエフライム人が報復攻撃をしかけ、これをギルアドの人々が倒したという出来事が付与されていることだ。アンモン人との戦いの参加をめぐる、ギルアドとエフライムの反目がこのように記されているのは、非常に示唆的である。

エフライムの人々は、士師記 8：1 でも対ミディアン人戦に呼ばれなかったとしてギデオン（マナセ族）を激しく責めたと記されている。ギデオンの慇懃な返答でエフライムの憤りは和らいだ（士 8：2-3）が、エフタのときは違う結果が生じた。こうした部族間の対立や反発感情を書き留めた生き生きとしたエピソードは、旧約聖書にあまり多くは表出していないだけに貴重である。ここには、エフライム人の敏感さ、あるいはプライドの高さが垣間見られる。武力においても強いエフライム人（詩 78：9）は、実は自分たちこそ歴史的にも地理的にもイスラエルの中心であると考えていたか

---

<sup>24</sup> *ibid.*

もしれない。

ここで、あまり表面化されていないギルアドの歴史の変遷について論述する。サウルおよび士師エフタ<sup>25</sup>とも関係の深いギルアドの地には、複雑な歴史的背景があることを見ておきたい。

ギルアドは一般にガド族の地と理解される（サム上13：7）が、士師記12：4によれば、ギルアドは「エフライムの逃亡者」פְּלִיטי אֶפְרַיִם であつたとされる。これにより「ギレアド [=ギルアド] が、東ヨルダンのガド族にではなく、エフライム族から分裂した一部族に属していた」ことが説明されるという。<sup>26</sup>

士師記12：2-3でエフタがエフライムとの関係を重視している<sup>27</sup> にもかかわらず、エフライムはギルアド人を「エフライムの逃亡者」と言って侮辱した。それは、元来ギルアドは「エフライムとマナセの間にいた」（士12：4b：私訳）<sup>28</sup>からだという。<sup>29</sup> これがエフタを刺激したようで、ギルアドの人々はエフライムと戦い、これを討つた（士12：4）。この過激な反応は、ギルアドの人々は元々属していたイスラエルから離れて、ギルアドの地に逃れ住み着いたことを推測させる。さらに士師記12：5-6の記事は、エフライムと袂を分かつたギルアドとの間の反目が、修復不可能な決裂に至つたことを意味していよう。士師記12章のエピソードは、エフライムの戦下あるいは政情不安から逃れてギルアドの地に住んだ人がいた時期、なおかつ、ギルアドの地がまだ他国によって占領されておらず、イスラエルの中に含まれると考えられた時期の出来事とみてよいだろう。それは、紀元前772年の北イスラエル王国の崩壊以前でのことであろう。<sup>30</sup>

<sup>25</sup> エフタは、長老たちに懇願されギルアドの全住民のかしら（士11：8）となってアンモン人と戦い、のちにイスラエルの士師とされた（士12：7）。ヘルツベルグは、主からの召命と民の承認による二つの任命は、エフタとサウル王の選びに共通すると述べる。-H・W・ヘルツベルグ著、小友聡・山本尚子・森田外雄・斎藤頌訳『ATD 旧約聖書註解5/2 ヨシュア記・士師記・ルツ記』、ATD・NTD 聖書註解刊行会、2000年、452頁。なお、筆者は、エフタの娘の悲劇の物語（士11：34-39）は、父親のゆえに結婚で幸福になれなかった（子を産まなかった）娘の話として、サウルの娘ミカルの不幸（サム上25：44、サム下3：13-16、6：16-23）と通底するものがあると考ええる。

<sup>26</sup> ヘルツベルグ、同上、458頁。

<sup>27</sup> 同上。

<sup>28</sup> 士師記12：4b: אִתָּם גָּלְעָד בְּתוֹךְ אֶפְרַיִם בְּתוֹךְ מְנַשֶּׁה

<sup>29</sup> 上記の箇所を「エフライムの中、マナセの間でじつとしているがよい」とした聖書協会共同訳はかなりの意訳である（下線部筆者）。新共同訳は「ギレアドはエフライムの中、マナセの中にいるはずだ」。

<sup>30</sup> ギルアドの地は、イスラエルがアモリ人の王シホンから戦い取つたもので（民21：21以下、申2：24以下）、モーセが半マナセ、ルベン、ガドの諸部族に与えた相続地である（ヨシュ13：8以下）。その後、ギルアドが他国によって占領されていたのは、イエフ王の時代（前9世紀後半-8世紀初頭）に、アラムの王ハザエルによって奪われた（王下10：32-33）が、イエフの子ヨアシ（王下13：25）、およびその息子ヤロブアム2世の代にすぐに奪還されている（王下14：25）。その後、ユダの王アハズの時代、前8世紀にアッシリア帝国が北から攻めて来た時、サマリア陥落（前722年）の前にアッシリアの王はダマスコを攻めてこれを占領している（王下16：9）。勢いに乗るアッシリア帝国はその後、「イスラエルの全土に攻め上つた」（王下17：5）とある。このとき、ガリラヤとギルアドは占領されたとみられる。アッシリアはサマリアに攻め上つて3年間包囲したのち、これを占領して、イスラエル人を捕囚とし（王下17：6）、代わりに諸外国人をサマリアに移住させた（王下17：24）。紀元前7世紀に入るとアッシリアの勢力が衰退し、ユダのヨシヤ王の時代に、サマリアの町

また、ミツパという地名はギルアド地方にもあり、<sup>31</sup> ベニヤミン領のミツパと混同されやすい。たとえば士師記10：17は、ヤボク川北側の本来のギルアドと、ヤボク川南側のガド族の地にあるミツパに両陣営が敷かれたことを指している。しかし後代になると、ベテルとラマの間に位置する、ベニヤミン領のミツパが重要性を持つてくる。ギルアドについての旧約聖書の扱いは実に複雑で、特にギルアドがイスラエルに属するのかどうかについての記述が非常に不鮮明なのである。

おそらく、イスラエルはかなり早い段階からギルアドの地方を所有し、ルベン、ガド、半マナセの部族の嗣業としたが、<sup>32</sup> 隣接するモアブ人やアンモン人らをはじめ諸外国からの脅威を断続的に受けており、それらの外敵の占領下に置かれていた時があれば、ヨルダンの西側のイスラエルと自由に行き来できた時もあったのだろう。しかし分裂した北イスラエル王国末期には、ギルアドは、シリアから勢力を伸ばしてきたアッシリア帝国によって、サマリアの陥落（前722年）以前に占領されており、それ以降回復されていない。つまりギルアドは、北王国滅亡時を境にイスラエルとは切り離されて、外国の地とみなされるようになったことは間違いない。

旧約聖書は、サマリア陥落以降のイスラエル（北王国）の記録を、驚くほどほとんど留めていない<sup>33</sup> のであるが、北王国滅亡後、存続したユダの大方の見方として、ギルアドはサマリアと同じかそれ以上に、非イスラエルとして批判的に捉えられるようになったものと考えられる。

それゆえ、(ヤベシュ)ギルアドが言及される場合、このような歴史的変遷を考慮する必要がある。

## 5) 参戦の呼びかけをめぐって

士師記においてエフライムは、外敵との戦いに呼ばれなかったとしてギデオンとエフタに対して

---

やベテル、ゲバにおいて宗教改革を行うことができた（王下23）のと同時に、いくぶん領土を回復したとみられる。しかしギルアドの地については、アッシリアの支配以来、明確に言及されなくなる。いちどアッシリアによって人種混淆が進んだギルアドの地は、その後イスラエルから切り離されていったようである。ギルアドは、新約時代にはデカポリス地方と呼ばれ（マルコ5：20）、ヨルダン川の西側のガリラヤやサマリアとは違い、異邦人の住む外国とみなされるようになっている。

<sup>31</sup> 「ギルアドのミツパ」（士11：29）。また、「ミツパ」とだけ記される箇所でも、士師10：29のほか創世記31：49、士師記11：11もギルアドのミツパを指している。

<sup>32</sup> ギルアドは、最古の資料デボラの歌（士5）で、イスラエルの戦いにおいて彼女の参戦の呼びかけに応じなかった4つの部族として名が挙げられている（士5：17）。民数記32章によれば、ギルアドは、元はアモリ人が住んでいた地で、モーセによりルベンとガド族に与えられ（民32：1、26、29、40）、東のマナセの半部族にも与えられた（ヨシュ22）。民数記26：29、30、36：1では、マナセの孫でマキルの子がギルアド、というように個人名と地名とが結びついて語られる点をもみても、早い段階でイスラエルの所有地とされた地方であることが窺われる。詩編60：9、108：8、エレミヤ22：6、50：19もギルアドがイスラエル所有の土地であったことを示す。ガド（部族）とギルアド（地方）が同定されることもあった（サム上13：7、王下10：33）。

<sup>33</sup> *The Last Days of the Kingdom of Israel*, (eds) Shuichi Hasegawa, Christoph Levin, Karen Radner, De Gruyter, Berlin, 2019, pp.1-2.

2 回不服を述べていた。これとは逆に、イスラエルの敵に向かうため全部族が集結し参戦するように呼びかけたのは、デボラ（士 4-5）、サウル（サム上 11 : 7-9）および、「レビ人」なる男（士 19 : 29-20）である。この 3 つのいずれにも、ギルアドないしヤベシュ・ギルアドが関係している。<sup>34</sup> これは偶然であろうか。

士師記 21 章では、イスラエルに参戦しなかった部族（士 21 : 8）と問われてヤベシュ・ギルアドが調べ上げられたのだから、彼らはイスラエル“部族”に相当する扱いを受けていたことになる。士師記 5 章のデボラの歌はヨルダン川東にとどまり続けたギルアドに言及する（士 5 : 17）。しかし、他の部族表（創 49、民 1、26 など）には、もはやギルアドの名は出てこない。<sup>35</sup>

ともあれ、イスラエルの全部族の中で主のもとに上らなかった（士 21 : 8）として名指しされたヤベシュ・ギルアドの町と住民は、士師記 21 章で滅ぼされる。彼らが救われたサムエル記上 11 章の裏返しのような話である。物語の設定上、ヤベシュ・ギルアドはイスラエルでありながら対ベニヤミン戦に集結しなかったとされるが、しかし実際に士師記 19-21 章が成立したのは、前述したように、ギルアドが非イスラエルとみなされてからのことであるのは間違いない。

結果として全イスラエルは、ベニヤミンの男性 600 人を残し、彼らにヤベシュ・ギルアドの処女を嫁として与えることでベニヤミン部族を絶滅から救ったが、反対にヤベシュ・ギルアドの住民を殲滅したのである。しかもその殲滅の命令は、共同体の派兵によって進められ、そこに主の命令に従ったとの言及はない。最終的に、イスラエルはベニヤミン部族を全滅させる代わりに、非イスラエルの（ヤベシュ・）ギルアドの住民に犠牲を払わせた、という形で決着した。

このことが士師記 19-21 章の重要な着地点であると考えられる。<sup>36</sup>

### 3 士師記 19-21 章と「ベニヤミン」 (省略)

#### 4 小結論

イスラエル 12 部族の一翼を担うベニヤミンに焦点を当てた旧約聖書の箇所から、この部族の歴

<sup>34</sup> ウェーバーは、これら、士師記 4-5 章、20 章、サム上 11 章の 3 箇所のみを聖戦として挙げている。-M. ウェーバー『古代ユダヤ教』内田芳明訳、岩波文庫、1996 年、128 頁。

<sup>35</sup> 並木は、デボラの歌は、そのほかの部族表とは区別されるべきだという。「デボラの歌は、参戦部族と不参戦部族を自由に言及するところに特色があって、部族順序を見出すのには不都合であり、また東ヨルダンのある地域の住民の指示のためにギレアデ〔ギルアド〕という地名が用いられているので、厳密には部族表の扱いができない」とした。-並木浩一『古代イスラエルとその周辺』新地書房、1979 年、106 頁。

<sup>36</sup> 博士論文第 5 章では、この後、士師記 19-21 章についてかなり詳しく論じているが、本論文では紙面の関係で省略した。士師記 19-21 章については、拙論「旧約聖書に隠された部族間の相克～ベニヤミン問題をめぐる考察～」、『伝道と神学』No.5、東京神学大学総合研究所、2015 年、163-189 頁も参照されたい。

史的変遷を紐解いた。創世記においてイスラエル（ヤコブ）の愛息子として、またヨセフの大事な弟として描かれるベニヤミンは、その重要な位置付けに見合うだけの自発的な発言がない点が、この部族が置かれた特徴を暗示している。

サムエル記において、ベニヤミン族から出たイスラエル初の王サウルと彼の家は、カリスマがありながらも力を封じ込められ下降する運命が描かれる。士師記 19-21 章では、ベニヤミンの汚行とそれを理由とする全イスラエルからの制裁戦争がクローズアップされる。一部族に集中した敵対視と処断が描かれた根源はおそらく一つではなく複雑に入り組んでおり、ベニヤミンという部族と土地に関する歴史的変遷が絡んでいるのであろう。

ベニヤミンは古くからイスラエルを構成する部族として存在し、地理的にも政治的にも中心的な位置を占めてきたと見られるが、歴史的な激動の影響を受けて大きく変貌した部族である。北王国の盟主エフライムとの関係を離れて南ユダに組み込まれる転換を余儀なくされた。それだけにトラブルも発生したが、歴史の中で消失した多くの他部族と違って、ベニヤミンは叩かれても消滅せず、柔軟にしぶとく存続する。イスラエルにとってのまさに「右の手の息子」なのである。

## 第6章 ユダについて

ここまで論じてきたイスラエル 12 部族の主要諸部族はどの部族もユダ族と深い関わりがあった。ユダとの直接的あるいは間接的な関係性における影響を受けて、諸部族はそれぞれの運命をたどったのである。旧約聖書の最終形態において、ユダはイスラエル 12 部族における筆頭に位置付けられるが、これは所与のものでなく獲得したものである。それは、おそらくダビデを輩出した部族であることと切り離せないが、そのことはイスラエルの歴史の流れの中で生じてきた変化であり、イスラエル全体にとって必要不可欠なことでもあったのだろう。その中心部族ユダの内側ではどんなことが生じていたのだろうか。

### 1 創世記におけるユダ

#### 1) ユダの名、誕生物語

個人としてのユダ<sup>37</sup> は、創世記 27 章-35 章のヤコブ物語において、族長ヤコブとレアの間に生

<sup>37</sup> 旧約聖書において「ユダ」の用例は約 820 回。地名、王国名としての用例が大部分で、部族名、個人名としての「ユダ」は 119 回ほど。

まれた第4子として登場する。12人の息子たち（部族）の中でもととの順位は高くない。

ユダの名の由来は「（主を）ほめたたえる」<sup>38</sup> であるが、その名 יהודה に聖四文字（יהוה）が含まれていることは特筆すべきことで、他の部族名にない特長である。<sup>39</sup>

また、創世記29章におけるルベン、シメオン、レビ、ユダの連続した誕生は、このレア系の主要な4部族が地理的には南方に位置する部族として古くから関わりがあったことを窺わせる。<sup>40</sup>

創世記の中では、レア系の主要な4人の息子たちに関して、彼らの行動に焦点を当てた個別の記事がある。レビとシメオンを中心とするシェケムでの事件（創34）<sup>41</sup>、長男ルベンが父の側女と通じた行為（創35:22）ユダと嫁タマルの交渉の出来事（創38章）である。それぞれ事情は異なるものの、いずれも男女の「婚姻」や「性的交渉」に関係する出来事であり、それも私的な密室の行為あるいは不祥事の報告である点で共通している。（しかし、それぞれのケースの「結果」は非常に異なる）。他方、ラケルの息子（ヨセフとベニヤミン）に関してはそのような記事はない。

## 2) ラケルとレアの対照

レア系の主要な息子たちに関わる「婚姻」や男女の「性的交渉」にまつわる個別の独特な内容は、ヤコブとレアとラケル姉妹との結婚の経緯においても見られる（創29:16-30）。<sup>42</sup>

ラケルは姿形が美しく（創29:17b）、その美点のゆえにヤコブの愛を勝ち得たが、因習と策略によって妻としては第二位に引き下げられた。ラケルは夫の愛という「実」を得たが、レアはヤコブの第一の妻という「名」を得たのである。レアは、ヤコブの息子12人のうち、合計6人の息

<sup>38</sup> הָדָה は本来は「投げる」という意味の動詞。Hifil形で「感謝する、ほめたたえる、賛美する」という意味になる。人に対しても、神（信仰の対象）に対しても用いられる。ヤコブの祝福の言葉（創49:8）の「ユダよ、兄弟はお前をほめたたえる」יְהוּדָה אֲהַבְתָּ אֶת־יְהוָה は、ユダの名と動詞 הָדָה との言葉遊びとなっている。

<sup>39</sup> TDOT (*Theological Dictionary of the Old Testament*) 5, pp. 482-3によれば、「ユダ」の用例の回数は地名、部族、個人の順に多い。ユダの名はもともと地名であり、ユダの地に存在した部族が、祖先ユダに結び付けられた可能性がある。また、ユダの名の起源は神名と無関係ではないと考えられている。

<sup>40</sup> 旧約最古の文献とされる士師記5章のイスラエルのカナンとの戦いに関する「デボラの歌」に、ルベンは言及されるがシメオン、レビ、ユダの名は登場しない。

<sup>41</sup> 創世記34章のシェケムの事件についての考察は、第2章、および拙論「旧約聖書における『レビ』および『レビ人』について—主の担い手としての存在と働き」（『神学』83号、東京神学大学神学会、教文館、2021年、191-224頁）193-9頁を参照されたい。シェケムにおいて、妹のディナがその地の首長の息子によって結婚前に汚されたことに憤ったヤコブの息子たちは、結婚許可の条件として割礼を利用しての復讐を計画。レビとシメオンが中心となって、割礼の傷の痛みを苦しむシェケムの男たちを剣で殺し、妹を取り戻し、町全体を略奪した。父ヤコブはレビとシメオンを非難したが、妹が娼婦のように扱われてもいいのか、と二人は反論。このシェケムに関する古い伝承は、創世記49:5-7と関連している。この事件はとくにレビに関連が深く、イスラエルの間に分け、散らされるというレビの運命と、その主に仕える特別な使命を特に決定づけるものとなったと考えられる。

<sup>42</sup> ラケルは父ラバンと姉レアに出し抜かれて、得るはずのヤコブの第一の妻の座を奪われ、順位が逆転した。しかも、この婚礼の夜の花嫁取り替え事件はひどい話に思われるが、嫁ぐのは姉が先だという（創29:26）という土地の風習を盾に、公然と非難されることもなかった。

子を自らヤコブに産んだ。この実績によって、レアは自分の名を高め、自らの子孫の数の数の上でも一家における勢力を増し加えることには成功したことが示唆される。

レア／ラケルの間の競争物語は、出産をめぐる非常にデリケートにバランスを取りながら展開する。ここでは両者の勢力は、母の胎内で押し争う双子のように（創 25 : 22-23、38 : 27-30）拮抗している。両者がバランスを取りながら競合し共存することは、イスラエルの繁栄と増強につながるということが暗示されているかもしれない。

同時に、子どもは注意深い計画のもとに生まれるとはいえ、「命の与え主は神のみである」という神学的に最も重要なことがここで言われているのも確かである。<sup>43</sup> したがって、男女の「結婚関係」によって—それがどのように仕組まれ、賞賛されない（律法に反する）類のものであったとしても—、子が生まれ、子孫が続いたと記されることは、神の恵みによるものと認識されるであろう。言い換えると、子孫の継続の事実こそが、アブラハム以来の主の恵みと祝福の証しであると理解されうる。旧約聖書において、このような認識のプロセスは、レア系のユダの家およびダビデとその子孫に関して顕著に見られる傾向である。その多くは物語に埋め込まれる形で、暗に示されている。

### 3) 「ヨセフ物語」におけるユダの台頭

兄弟たちの中で順位の高くなかったユダが、いかにしてリーダー的存在を獲得していくのか。まずはレアの主要な 4 人の息子たちのうち、レアが獲得した「名」が第 4 子のユダに確実に絞り込まれてゆく過程を、創世記の「ヨセフ物語」の展開の中に見ていきたい。

「ヨセフ物語」の冒頭では弟ヨセフに対する長男ルベンの言動は、兄弟を代表し（創 37 : 21-23、30）、父ヤコブの心情を代弁するものとして描かれていた（創 37 : 30、34、cf. 42 : 22）。<sup>44</sup>

しかし 42 章以降、変化する。末弟ベニヤミンの同行要求に対してのルベンのやや感情的で軽率な発言（創 42 : 37）と対照的に、ユダは 43 章以降、冷静に事の次第を父の前に説明し、ベニヤミ

<sup>43</sup> Walter Brueggemann, *Genesis, Interpretation*, John Knox Press, 1983, p.255. (『現代聖書注解 創世記』向井孝史訳、日本基督教団出版局、1986 年)。

<sup>44</sup> ルベンは、長男として父の力と祝福を継承する立場にあった（創 49 : 3）。しかしルベンは、ラケルの死後、その召使いであった父の側女ビルハを自分のものにする（創 35 : 22）。しかも「このことはイスラエルの耳にも入った」（同）。これは、家長としての父ヤコブの権威を、長男ルベンが取って代わろうとする意思表示であろう。—この点は、シメオンとレビに関わる創世記 34 章のシェケムの事件の発端となった、青年シェケムがヤコブの娘ディナを恋い慕うあまりに、彼女を捕らえて寝て辱めた（創 34 : 2）行為の動機とは異なる。

ルベンのしたことをヤコブは直接咎めなかったが、ルベンはその自分の行為のゆえに、長子の特権を失うという代償を払うことになる（レビ 18 : 8 ; cf. 創 49 : 4）。なお、歴史的に、ルベンは古い部族であったが、早いうちに勢力を失っていったと考えられている。申命記 33 : 6 参照。Gelander は、ルベンの失墜は、民数記 16 章に記される「コラの反逆」に、ルベンの一族が加わったことが決定的な敗因となって凋落したのではないかと推測する。-Shamai Gelander, *From Two Kingdoms to One Nation – Israel and Judah, Studies in Division and Unification*, Studia Semitica Neerlandica, Vol. 56, Brill, 2011, p.218.

ンを連れていくことの必要性を説いた。このユダの発言（創 43：8-10）には、ルベンの子らを含め家族全員の命に対する責任と、一切の罪過を自分が引き受けるという強い決意がにじみ出ている。とくに、自分が末弟ベニヤミンの保護者となる覚悟を表明して、父からの信頼を得た。

ここにおいて、ルベンとユダの立場が逆転している。さらにこれ以降、ユダの優位は一層顕著なものとなる。「ユダと兄弟が」（創 44：14）という主語が用いられ、ユダが兄弟を代表して交渉に当たる。ユダは長い嘆願の言葉をヨセフに聞かせ（創 44：18-34）、父と弟ベニヤミンを思う殊勝な言葉でヨセフの心を動かした。こうして雄弁で家族思いで主導力のあるユダが、兄弟間の溝を修復するのに大きな役目を果たし、<sup>45</sup> ユダは父からも高く信頼される（創 46：28）。

このように、「ヨセフ物語」は、エジプトにおけるヨセフその人を中心に据えながらも、同時に、兄弟の中でのユダの立ち位置が確実に上昇していき、長子ルベンに代わる代表者として兄弟を統率していく展開をもそのディーテールにおいて如実に呈しているのである。

他方、ヨセフとユダの関係は、双方の母たちと同じようにデリケートに展開する。

ユダは父と一度は捨てた弟ヨセフに対して非常に懇懇にふるまう。一方、宰相となったヨセフは、父から最期の願いを直に聞いており（創 47：27 以下）、荘厳な葬りを執り行って（創 50：1-14）父との約束を果たした。かつてヨセフの見た夢（創 37：5-11）は実現した。またヤコブは、死の前に、ヨセフの二人の子（エフライムとマナセ）を養子に迎えるためにこ祝福を与えている（創 48）。

父ヤコブの愛がラケルに注がれたように、「ヨセフ物語」を通してヤコブ／イスラエルの祝福の対象は、愛＝「実」の獲得者であるラケルの子らに向かうことへの固執があるのだ。<sup>46</sup> 父ヤコブ／イスラエルとヨセフおよびベニヤミンの親兄弟の関係の調和は終始崩れず、堅固に貫かれている（創 43：14、29 以下、44：30-31、45：3、13-14、22-23、28、46：29-30、48：22）。

しかしながら、話は単純ではない。父からは溺愛されたが兄たちから憎まれたヨセフは、実際はユダの提案によってエジプトに売り飛ばされた身だ。エジプト人との妻の間に子を得た<sup>47</sup>（創 41：50-51）段階で、ヨセフのエジプトでの位置は不動となったが、同時にイスラエルの系図上では傍

<sup>45</sup> こうしたユダのとくにベニヤミンに対する主導的側面は、士師記 19-21 章の対ベニヤミン戦争においても明白に現れる（士 20：18）。士師記 1：1-4 参照。

<sup>46</sup> 歴代誌上 5：1-2 には、「ルベンは長男であったが、父の寝床を汚したので、その長男の権利はイスラエルの子ヨセフの子らに与えられた。…兄弟の中で力があつたのはユダで、そこから指導者が出たが、長男の権利はヨセフのものとなった」と記される。

<sup>47</sup> ヨセフはオンの祭司ポティ・フェラの娘アナセトを妻に迎え、彼女との間に、長男マナセ、次男エフライムを生んだ。オンの祭司は、エジプトの太陽神を司る最高位の聖職者である。これによってヨセフのエジプトでの高位は確実なものとなった。なお、ヨセフとマナセ（マキル）・エフライムとの関係や、イスラエルの起源に関わる考察については、拙論「イスラエル 12 部族におけるマナセの位置」、『伝道と神学』No.9、東京神学大学総合研究所、2019 年、85-100 頁を参照されたい。

系となることが決定したのである。こうしてエジプトでは「名」を得たヨセフとヨセフの家は、持っていた「実」をベニヤミンとの関係も含めてユダに次第に譲り渡していくことになる。

また、創世記 49 章において「ヤコブの祝福」を受けるのは、言葉の分量から見ても、ユダとヨセフが双璧であるが、その内容は微妙に異なる。<sup>48</sup> ヨセフに対しては、6 回の「祝福」という言葉の連続（創 49：25-26）によって、ヨセフこそが父を通して神の祝福を受ける者であることが明示されている。一方、ユダに対しては、父からの直接の祝福の言葉はないが、イスラエル 12 部族の時代にリーダーとなるのはユダであること（創 49：8）と、イスラエルを統治する王権はユダのものであること（同 10 節）が示唆されている。

これらは明らかに、ユダ族出身のダビデから興されたダビデ王家（南ユダ王国）に言及したもので、付加的であろう。<sup>49</sup> なお、「ヤコブの祝福」で、上の 3 人の兄が排除され（ルベン：創 49：4；35：22／シメオンとレビ：創 49：5-7；34 章）、第 4 子のユダが兄弟の中の主導的立場に踊り出ることが「ヨセフ物語」の最後で確定される。

## 2 ユダの家の継続

以上、ヨセフ物語において、ユダが他の兄弟たちを主導し政治的なイスラエルのリーダーとなってゆくことの正当性が示されていく足跡を見てきた。しかし、それは決してユダ一代限りの話ではないはずだ。「ユダの家」は主導的地位をいつまでも継承していく必要があり、それにはどうしても後継者となる子孫の存在が不可欠となろう。このテーマを裏付けるように描かれているのが、創世記 38 章とルツ記であると考えられる。

### 1) ユダとタマル 創世記 38 章

創世記 38 章は「ヨセフ物語」の開始直後に挿入される形で、ユダの家庭に焦点があたるという特異性がある。一見するとユダ個人に関するネガティブで醜聞めいた内容が記されているようであり、必ずしもそうではない。上の 3 人の兄たちと結果が異なるだけでなく、初めから複雑かつ非常に巧妙な筋書きのもとに、「ユダの家」についての計り難い主の恵みと関与が物語られているのである。

<sup>48</sup> 申命記 33 章の「モーセの祝福」においては、ヨセフには祝福と賞賛の言葉が集中するが、ユダに対する言葉はわずかで、祝福というより執り成しに近い。

<sup>49</sup> フォン・ラートは、「歴史的に見れば、ユダはその王権によって初めて兄弟部族に優越する地位を獲得した。ユダは、王を出すことによって、それまでの孤立した存在から政治生活の中心へと彗星のように躍り出たのである」と述べる。G・フォン・ラート著、山我哲雄訳『ATD 旧約聖書註解 1 創世記下』ATD・NTD 聖書註解刊行会、1993 年、790 頁。

ヤコブの息子の第四男のユダはカナン人シュアの娘と結婚し（これについての批判なし）、エル、オナン、シェラの 3 人の息子を得た。長男エルはタマル<sup>50</sup>と結婚したが死に、次男のオナンがタマルを妻に迎えたが、二人とも「主の意に反した」（創 38 : 7、10）かどで死ぬ（＝主に殺される）という不吉な事が起こる。<sup>51</sup> ここですでにユダの家の後継者が続くことは主の願いであることが示唆されている。ユダはこれ以上の惨事を嫌い、残った息子シェラを惜しみ、制度（「レビラート婚」：申 25 : 5 以下）を無視して、寡婦となったタマルを不当に扱った。<sup>52</sup> ユダは、家の後継ぎ問題を放置して、嫁タマルと主に対する違反行為を行なっている。しかし、タマルの大胆な行動によって彼女はユダの子を身ごもった。<sup>53</sup> タマルは姦淫の罪を疑われたが、子の父親はユダであると証明してみせた。タマルは自分の行動の正当性を認めさせ、生まれる子が私生児になるのを防ぎ、子と自分とユダの家を守ったのである。こうしてユダ個人の隠れた行為は、妊娠したタマルによって暴露される<sup>54</sup> がユダも守られた。なんら非難されることなく、タマルを通してユダ自らが律法義務を果たす結果となり、ユダの家の「名」は守られ（申 25 : 10）、子孫まで与えられるという祝福を与えられた。

タマルが産んだ息子のうちのペレツの家系からダビデが生まれた（ルツ 4 : 18-22、代上 2 : 3-14 ; マタイ 1 : 3-6、ルカ 3 : 31-32）。結果、主の特別な恵みはダビデへと向かうという主張になる。

<sup>50</sup> タマルは、特に出自が記されないことから、イスラエル女性と考えられよう。タマルの名を持つ女性は、ユダの嫁のほか、ダビデの娘でアブシャロムの妹のタマル（サム下 13 : 1 ほか）、およびアブシャロムの娘タマル（サム下 14 : 27）がいて、ユダ/ダビデと非常に関係が深い名前である。タマルは、男性名詞で「なつめやし」。ただし、旧約偽典のヨベル書 41 : 1、十二族長の遺訓ではユダの遺訓 10 : 1 において、タマルはアラム人の娘と書かれる。

<sup>51</sup> Amit は、創世記 38 章には明からさまではないが、ユダがカナンの女性シュアと結婚していることに関してユダの家系（ダビデ）への隠れた批判（Polemic）が含まれているのではないかと見る。-Yairah Amit, *Hidden Polemics in Biblical Narrative* (trans. by Jonathan Chipman), *Biblical Interpretation Series* v. 25, Brill, 2000, pp.79-80. たしかに、創世記 38 章は外国人（カナン人）との結婚を批判していないが、シュアではなくイスラエルの女性タマルが産んだペレツの系列が主軸になるという結果が全てを物語っているのかもしれない。アブラハムもヨセフもエジプト女性と関係したが、ハガルの子イシュマエルは傍系であり、ヨセフとエジプト人妻の子とされるマナセとエフライムは、ヤコブの養子になったとはいえ、北王国は滅亡し外国人との混血が進んだという運命も考え合わせると、創世記 38 章は、ユダの家系の正統性を、ヨセフの家に対して暗に主張していると見ることができる。

<sup>52</sup> 「古代社会ではこのような場合、死を齎した原因はその女性自体にあると見られたため」である。-フォン・ラート『創世記下』、663 頁。

<sup>53</sup> なお、この箇所舞台ティムナ（創 38 : 12）はサムソンの物語と共通する（士 14）が、サムソンはペリシテ人の妻に翻弄されたあげく友人に取られ、サムソンと妻の間に子は与えられていない（士 14 : 20-15 : 6）。サムソンの破壊的行為は、ユダにとってペリシテ人の脅威を増大させ、ユダの兵士はサムソンをペリシテの手に渡そうとしたと記される（士 15 : 9-13）。この点で、サムソンと、ペリシテ軍によって戦死したサウルのイメージとが重なる。

<sup>54</sup> 聖書において、家庭外的女性との一度の交渉による妊娠でその関係が暴露されたエピソードは、他にはサムエル記下 11 章のダビデとバト・シェバの関係が唯一挙げられる。

創世記 38 章の語りにおいてユダのイノセンス（不関与）が強調されることで、息子たちの罪やユダの無知や勘違いを覆うようにして、ユダの家を恵み、生の起点に関与する主の存在が浮かび上がる。この出来事の結実である子の妊娠に真に関わるのは、人間的な過ちの罪を赦し、ユダの家に新しい命の継承をもたらす意志をもった主であることが主張されるのである。<sup>55</sup>

創世記 38 章には、ダビデを生み出したユダの家系が、過去、現在を経て将来的にも継続することへの願望とその拠り所が明示されていると言ってよいであろう。創世記 38 章は、いわば物語られたユダ部族の系図であり、また「ヤコブ物語」と「ヨセフ物語」の中間に挿入される形で位置を占めた「ユダ物語」と言えるのではないか。<sup>56</sup>

子が与えられることは、まさに神の providence（摂理）と呼ばれるにふさわしい出来事であろう。神の摂理は子の妊娠に結びつく。聖書においてこのことは、特にイスラエルを存続の危機から救い、生き延びさせようとして、主が選ばれた女性の胎を開き、子を生まれさせるという語りや筋書きの中に多く埋め込まれている。これは、とりわけ特徴的にユダの系図に結びついているのである。<sup>57</sup>

その意図は、ユダから出たダビデの家のイスラエル指導者としての正当性やその王権の優位性の主張のためであろう。イスラエル 12 部族内部のユダの対抗勢力（ヨセフの家、北イスラエル王国、ベニヤミン族など）に対して、歴史的なある時期においてその必要があったということだ。

しかしそれだけではない。そうした過去の歴史を踏まえつつ、北王国滅亡後、南ユダ王国が事実上、唯一のイスラエルの継承者となり、さらに紀元前 6 世紀にその南ユダ王国も滅んだのちにも、主の恵みによってダビデ王家／ユダ族の血筋は「いつまでも」続くという希望が、ユダ内部に興り、それがまた全イスラエルの終末論的な希望となってこの一本の線に集中化しているのであろう。

## 2) ユダとダビデをつなぐ「ルツ記」

ユダの家庭内ドラマのような創世記 38 章と類似する趣旨とエピソードが「ルツ記」にもある。

創世記 38 章冒頭において、ユダの 2 人の息子が死んで後継者がいなくなる危機に陥ったように、ルツ記冒頭で「ユダのベツレヘム出身のエフラタ人」<sup>58</sup> の一家の 2 人の息子の死が語られる。息子

<sup>55</sup> Amit, op.cit..

<sup>56</sup> 創世記 38 : 27 以下で、双子の出産時に、先に出した手に初子のしるしとしての真紅の糸を付けられたがその手を引っ込めたゼラ（＝起きる／輝く）と、そこに割り込んで先に生まれたペレツ（＝割り込む／出し抜く）の名と対比とが、ラケル（ヨセフ・北王国）とレア（ユダ・南王国）の対立・競争関係を比喩的に表現していると考えられる。

<sup>57</sup> 創世記 4 : 1、21 : 1-2、25 : 21-23、29 : 31、30 : 5、17、22、士師記 13 : 1-24、ルツ記 4 : 13、サムエル記上 1 : 19-20 ; マタイ 1 : 18 以下、ルカ 1 : 13-25、1 : 30-27。

<sup>58</sup> ルツ記 1 : 1 אִישׁ מִבֵּית לֶחֶם הַהַרְדֵּי、および 1 : 2 אֲפַרְתַּיִם מִבֵּית לֶחֶם הַהַרְדֵּי

たちに子はなく、母ナオミと2人の嫁が残された。将来子孫が与えられる見通しはない。

ルツ記4章では、結局、近親者ボアズが「ゴーエール」(贖う人) となって畑を買い取り、嫁ルツも妻として買い取り、子も生まれるという幸いな結果が記される。ナオミ、ルツ、ボアズは全員、自覚的に行動し、家名存続のために貢献した。彼らは、ルツ記4:11以下にあるように「タマルがユダに産んだペレツの家のようになるように」願われ、主の祝福を受ける。「オベドはエッサイをもうけ、エッサイはダビデをもうけた」(ルツ4:22)。

こうしてダビデの曾祖父母にあたる家族の美しい物語は、「ダビデ」の誕生につながることで、非常に重要な存在意義と格段の輝きを放つ。ルツ記は、「士師たちが世を治めていた頃」(ルツ1:1) という時代設定に始まり、最後の後は「ダビデを」(ルツ4:22) で結ばれていて、これが物語全体の枠組みを成しているとみれば、士師の時代にイスラエルを治める王(=ダビデ)の登場が待たれていたという背景によく合致する。<sup>59</sup>

ルツ記は、イスラエル全体を統率する支柱としてのダビデ王家とユダ部族に寄与するために書かれた文書であることは間違いない。とりわけ、その一つの家系の存続が問題の焦点となっており、ルツ記の「以前」(ユダ)と「以後」(ダビデ)を系図的につなぐ役割を果たしていると言える<sup>60</sup>。

ルツ記が創世記38章をふまえていることは、ルツ記4:12で明らかである。

ルツ記3章でナオミが計画して、夜中にルツをボアズの寝床の衣の下に送りこんだ(ルツ3:13)ことは、実は大胆でスキャンダラスなことであった。しかし前述したように、同じ類のことが彼らの先祖においても行われている。<sup>61</sup> いずれも公然と批判や処罰を受けないだけの、因習的理由(=ゴーエール、レビラート婚、嫁ぐ順番など)があり、結果として息子が生まれる。彼ら(ユダ、ペレツ、オベド)は皆、イスラエルを治める王ダビデに連なる系譜の主要人物として覚えられる。<sup>62</sup>

子どもが与えられることと並んで、ルツ記のもう一つのテーマは、土地への回帰であろう。ルツ記では、飢饉でモアブに寄留していたエリメレク一家が、悲劇を経験した後、本来の居住地に戻ることが切実に願われている。ルツ記が書かれた年代について、研究者の見解は様々で、特定されていない<sup>63</sup>が、この二つのテーマから考えると、ルツ記が書かれたのは、王国時代や捕囚前ではな

<sup>59</sup> 左近淑、『旧約の学び 下—ルツ物語・ダビデ王物語』日本基督教団出版局、1982年、44-5頁参照。

<sup>60</sup> 同上、47頁。

<sup>61</sup> すなわち、嫁タマルが計画して、息子を与えない舅ユダの懐に自身を与えたこと(創38)および、舅ラバンが計画して、婿ヤコブの寝床に、長女レアを先に与えたこと(創29)をさす。

<sup>62</sup> 創世記16章で、「妻サラ(イ)が計画して、夫アブ(ラ)ハムに女奴隷ハガルを与えたこと」(創16)も、行動としては同じ類に相当すると考えるが、エジプト人ハガルがアブラハムに生んだ息子イシュマエルはイスラエルの系譜ではなく、サラから生まれたイサクが後継者となるため、ここでは同列としない。

<sup>63</sup> 左近淑は、ルツ記の著作年代について研究者の意見は初期王国期(キャンベル、ホールズなど)、捕囚前(ルドルフ、ヴィツェンラートなど)、捕囚期(イエブツェン)、捕囚後(フォーラー、カイザー、スメン

く、国の崩壊と悲劇を経験した捕囚期以後であろう。<sup>64</sup>

王国崩壊後のイスラエル存続の望みは、おそらくダビデ／ユダの系譜において最も強く表出される道筋を取り、その後の民族復興の希望をダビデの王家の継続につなぐという流れが生じたとしても不思議はない。この点は、他の部族、とりわけ最初の王サウルを出したベニヤミンについても、旧約聖書においてほとんど表面化していない傾向であると言える。<sup>65</sup>

それゆえルツ記においては、物語の舞台となる土地ベツレヘムもダビデと深く結びついている。

### 3 ダビデの家について

これまでの創世記 38 章、ルツ記を中心とする論述を踏まえた上で、両者が指し示しているダビデとダビデの家について考察してゆきたい。

#### 1) ダビデの出自

ダビデの出身地は、ユダのベツレヘムであると明言される。ルツ-ボアズの間にも生まれたオベドにダビデの父エッサイが生まれたとされる（ルツ 4 : 17、21-22）。<sup>66</sup>

ただ、ペレツの系図がダビデにつながったと記すのは、ルツ記 4 : 18-22 と歴代誌上 2 : 5-12 のみである。サムエル記ではダビデの出自は「ユダのベツレヘムのエフラタ人エッサイの息子」（サム上 16、17 : 12）とだけ記される。サウルの先祖が 5 代前まで遡って記される（サム上 9 : 1）のとは対照的である。ペレツの系図にダビデをつなげるのは、ダビデが「イスラエル」の正統的な部族から出た王であるとの主張のもとに、後代に縫い合わされたものではないかという疑問を生じさせる。

また、ダビデの曾祖母とされるルツがモアブの女性であることをどう捉えたらよいか。<sup>67</sup> 旧

---

ト、ソジンなど最近の大部分の緒論、ゴーディス、関根など）と大きく別れており、サッソン、チャイルズもこの点について決定的発言を避けているとし、この文学小品の年代を決定する証拠を有していないと見る。-石田友雄、木田献一、左近淑、西村俊昭、野本真也著、『総説 旧約聖書』日本基督教団出版局、1984年、495-6 頁。

<sup>64</sup> Walter Brueggemann, "Heir and Land : The Royal 'Envelope' of the Books of Kings", *The Fate of King David : The Past and Present of a Biblical Icon*, ed. by Tod Linafelt, Claudia V. Camp and Timothy Beal, T & T Clark, 2010, pp. 85-100 参照。

<sup>65</sup> 例えば、ベニヤミン族の主人公を中心とする「エステル記」では、バビロン捕囚後、祖国に帰還せず異国（ペルシアのスサ）に生活するユダヤ民族に対する迫害からの救いがテーマであって、子孫の継続や土地の回復への言及はない。

<sup>66</sup> ダビデには上に 7 人の兄たちがいたが、サムエルがベツレヘムに来て生贄をささげる儀式の際にも、末子で 8 番目の息子ダビデは他所で羊の群れの番をしており（サム上 16 : 10 以下、17 : 12-15）、家庭の中では軽んじられていた。ルツ記においては、ナオミにとって、「7 人の息子にもまさるあなたを愛する嫁」（ルツ 4 : 15）であるルツが産んだ子（ペレツ）が、ダビデ（8 番目の息子）につながった。

<sup>67</sup> ルツは、姑ナオミの信仰を受け入れて心はイスラエルに帰属した（ルツ 1 : 16-17）とも考えられる。し

約聖書においてモアブは背信的な民として否定的に描かれることが多い（創 19 : 36-37、民 25 : 1-5 など）。そのモアブ女性の血がダビデに流れていることをルツ記の著者は隠さない。

実際にダビデは、サウル王からの逃亡中、一時的に両親の保護をモアブの王に託したことがあり（サム上 22 : 3-4）、<sup>68</sup> モアブとの親戚関係は明らかである。ダビデとモアブとの親戚関係は明確だが、後にダビデはモアブ人への過酷な措置を下してもいて（サム下 8 : 2）、揺らぎがある。

また、イスラエルの宿敵とされるアンモン人との間でもダビデは微妙に上手く立ち回っている。ダビデは第 5 章で触れたアンモン人のナハシュとの間に何らかの友好／利害関係があったようだ（サム下 10 章、17 : 27 以下）。<sup>69</sup>

サムエル記下 8 章に列挙される諸外国民がすべてダビデの戦勝相手でなかったとしても、ダビデは以前からの卓越した政治手腕や外交努力によって、周辺に住む彼らと手を結び、協力・友好関係を築き上げ始めていたということは十分考えられよう。ユダの一部族だけでは支持の足りない部分を補うため、ダビデはそうした周辺の諸民族を上手に取り込み懐柔することで、王国の勢力を保とうと努めていたのではないだろうか。<sup>70</sup>

## 2) ダビデの台頭と部族間の関係

ではもともとサウルに仕えていたダビデの一家の末子のダビデが、どのようにユダとイスラエルを統治して、統一王国の王になっていったのか。

サウル王を見限ったサムエル（サム上 15）は、主が見出した少年ダビデに油を注ぐ（サム上 16）。サウルはダビデを気に入り召しかかえるが、サムエル記上 18 章において両者は乖離していく。サウル王の敵意や懸念が一方的に描かれ（サム上 18 : 8、9）、ダビデが王位を狙う謀反人であるとサウルが疑っていたこと（サム上 20 : 31）を暗示させる。サウルに着せられたこの妬みや猜疑心は、ベニヤミンとユダの確執の原点か象徴のように思われる。一方ダビデは、サウルの長子ヨナタンと次女ミカルとの強い結びつきもあって、サウルの家臣から親戚（娘婿）へと身分が上昇した。

---

かしルツは終始「モアブの女ルツ」（2 : 2、21、4 : 5、10）、「モアブの娘」（2 : 6）と呼ばれ記される。しかもボアズに妻として「買い取られる」（4 : 5、10）立場である。ここにイスラエルは、信仰において周辺民族を包括するものの、一方でユダヤ民族主義的には、他民族との区別を排除しない姿勢を窺い見ることができ

<sup>68</sup> ここで唯一、ダビデの父母／両親の存在についての言及がある。ダビデの父エッサイの妻の名はどこにも記されず、ダビデの母が「不明」であるのは、考えてみれば非常に不自然なことだ。ダビデの母の名と存在を表に出せない事情があったのだろうか。

<sup>69</sup> サム下 17 : 25、代上 2 : 16 の系図を総合すると、ナハシュの妻は、エッサイの妻でダビデの母、であるようにも読める。少なくともダビデの家は、アンモン人との友好的な関係にあったことは疑いようがない。

<sup>70</sup> もしそうしたことが周知の事であったなら、創世記 19 : 30 以下のモアブとアンモンの記事は、逆にダビデへの隠れた痛烈な批判を込めて書かれたものである可能性が浮上しよう。

ダビデがサウルの王位に対する「野心」を抱いていたかどうかは明示されない。だが逆に、明示されないことによって、創世記 38 章やルツ記に見られるように、実現した結果をもって、個人の狙いや計画を超えて働かれる主のご計画を理解する方へと読者は促されてゆくのである。

いずれにしてもダビデはサウル王に見出され、その家族・近親者をも惹きつけ、さらに自ら手を汚すことなく（篡奪者でなく）、サウル家の王権さえもダビデの手に正當的に移されていく。

ダビデは、逆にベニヤミン族のサウル王家に同化されることはなかったのだろうか。それはありえたかもしれないが、ダビデは、結局ベニヤミン部族にはなびかず、ダビデの部族ユダの名を負ってゆくのである。

ドゥ・ヴォーは、モーヴィンケルらによる、ユダの部族はダビデの時期以前には形成されなかったとの結論を支持し、「ユダの部族がその真の同一性を見出したのはダビデの下においてであり、またダビデによってであるように思われる」と述べている。<sup>71</sup>

De Geus もこれを敷衍し、部族ユダについて、以下のように指摘している。<sup>72</sup>

① のちの“ユダ”は以下のような人々の集団の複合体である。

- a) シメオンの残りの者たち<sup>73</sup> のような古来のイスラエル人、おそらくヘブロン近辺にいたレビ人の集団、テコアやベツレヘムのような土地の氏族たち、さらにエフライム人の集団
- b) カレブ人、エラフメエル人、ケニ人    c) カナンの少数集団

② ユダに関しては古い境界線が存在しない。今ある境界線は、単純にカナンの南と南西の国境である。東側は自然の境界で、ユダの北側の境界線はダビデ下の状況を反映したものである。

③ ユダにはカナン入植およびカナン征服の伝承が全くない。

たしかにダビデは「ベツレヘムのエッサイの息子」（サム上 16 : 1, 17 : 58）、「ユダのベツレヘム出身のエフラタ人エッサイの息子」（サム上 17 : 12）とだけ説明され、ユダ族であるとは言明されない。もし仮に、ダビデとその家が伝統的な“イスラエル 12 部族の中心的存在のユダ族”に属していたのなら、サウルの息子ヨナタンがダビデの家と契約を結んで、「ダビデに敵対する者は主から報復されるように」（サム上 20 : 16）と安全保障を誓う必要もなかっただろう。

それではいつ、ユダはイスラエルの一部族となっていったのか。

<sup>71</sup> R. ドゥ・ヴォー、『イスラエル古代史』、756-7 頁。これによりデボラの歌（士 5）にユダがないことの説明がつく。

<sup>72</sup> De Geus, C.H.J., *The Tribes of Israel: An Investigation into Some of the Presuppositions of Martin Noth's Amphictyony Hypothesis*, Van Gorcum, 1976, p.112.

<sup>73</sup> シメオンの部族は、申命記 33 章には欠如しており、ドゥ・ヴォーは「この部族がすでにユダによって吸収されたと説明する以下には説明され得ない」としている。前掲書、756 頁。

サウル王は、少年ダビデを召したのち、やがて彼を妬み、激しく敵視するように変化した。こうした描写は、実はサウル／ベニヤミンが急速に台頭し接近してきたダビデ／ユダを非常に警戒し、遠ざけようとしたことの反映だったのではないか。しかし彼の次の世代は違った。サウルの息子ヨナタン<sup>74</sup>と娘のミカルはダビデを主体的に「愛する」ことで彼を受け入れたことが明記されている。

このヨナタンとミカルのダビデへの非常に大きな好意は、当時イスラエルを統治していたベニヤミン族のサウル王家が、ダビデとその背後にあるダビデの家をイスラエルの王位に就く家として認めたとすることを（史実はともかく）示す目的で書かれたのであろう。まさに「ダビデの家と契約を結んだ」（サム上 20 : 16 ; 22 : 8）ヨナタンと、ダビデと結婚したミカル<sup>75</sup>とが、ダビデの命を付け狙うダビデの宿敵・父サウルの手から守り（サム上 19 : 1-17、20 : 1 以下）、それと共に、結果的にユダ部族の成立を助けたと言えるのではないだろうか。

ダビデの逃亡中にも、ヨナタンとダビデは主の前で契約を結び（サム上 23 : 15 以下）、最終的には、サウル自身もダビデが王位を継ぐことを認めている（サム上 24 : 21）。

こうした記述はおそらく後代の挿入であろうが、この時ダビデ／ユダはイスラエルの一員として、ベニヤミンのサウル家と盟約を結んだことが暗示されているように思われる。またここにおいて、捕囚を経験する崩壊期に、ユダとベニヤミンが共存することを通して、主の民「イスラエル」を永続的にあるいは終末論的に築いていく礎となっていくことも示されている。

ダビデの王権は、このようにサウル王の後に確立することを希求されることによって初めて、確実に無理なくイスラエルの上に定着することが可能になるのである。それと同時に、ダビデのユダは、イスラエルを構成する「一部族」としての存在を確保していく一步を得たのだと考えられる。

このような手続きがなければ、ダビデ以前にはなかったとみられる未形成の「ユダ」が、古来より存続していた「イスラエル」に迎え入れられ、融合し、さらに君臨してゆくことは不可能であったのではないだろうか。その意味で、ユダ（ダビデ）のためにベニヤミン（サウル）の果たしていた役割は、無視できないほど大きかったということが言える。

ダビデが踊り出るのは、ペリシテ軍に敗れたサウルとヨナタンの死後（サム上 31）であった。

ダビデは、まず主の託宣を受けてヘブロンに上ると、ユダの人々はダビデに油を注ぎ、「ユダの家

<sup>74</sup> サムエル記上 14 : 1-46 には、ヨナタンが父サウルにも勝る優れた武将であり、兵士たちへの労いと責任を負う英雄であることが記され、サウルとの対照が鮮明にされている。サムエル記上 30 章のダビデの兵士への配慮ある振る舞いとも共通するように思われる。しかし、サウルが退けられることになるアマレク人との戦い（サム上 15）では、不思議なことにヨナタンの姿はない。

<sup>75</sup> サム上 18 : 28 は「サウルは、主がダビデと共におられること、娘ミカルがダビデを愛していることを見て、知った」（私訳）と記し、この二つの事象を並列に置き、同じくらいの重さで受け止めていることに注意。

の王」 מֶלֶךְ עַל־בֵּית יְהוּדָה とした (サム下 2 : 1-3)。ダビデは、ベツレヘムにおいてすでにサムエルの手のより主の御前に油を注がれていた (サム上 16) ので、ヘブロンでの油注ぎはユダの人々にとって初めての自分たちの王に対する即位儀式である。このダビデを自分たちのユダの王とした段階で、ユダの人々は部族的「ユダ」としての統一体を形成し始めたと言えるのではないか。

### 3) ダビデの王位とサウルの家との確執

ダビデはサウル王の死後ヘブロンでユダの王となったが、それだけに止まらない。ヘブロンにいる 7 年半の間に、イスラエルの支配権も手に入れていく。

ダビデは、自分の王権はイスラエルを統治していたサウル王家から連続するものと考えていたことは間違いないだろう。サウルに油を注いだサムエルその人が、次にダビデに油を注いだこと (サム上 16 : 13) も、このサウルからダビデへの連続性を浮き上がらせる。この関係は、複雑な歴史的経過を経て、後の「ユダとベニヤミン」の共存関係の基礎になったと考えられる (第 7 章で論述)。

ダビデ即位の時、イスラエルの全部族 が「私たちはあなたの骨肉です」 וְעַמִּי וְיִשְׂרָאֵל אֲנָחְנוּ と述べた (サム下 5 : 1、cf. 19 : 13))。ここにおいて、ダビデの部族ユダはついにイスラエルの全部族と骨肉を分けた兄弟であるとの宣言を受けたと言ってよいであろう。

ダビデの行動は、ベニヤミンの人々やサウル王家を巻き込んで、激動をもたらしたが、結果として、サウル家ではなくダビデの家の王権を堅固にする流れが生じている。そこに通底するのは、主に対する責任を優先させるダビデの信仰の姿勢と、これと呼応するようにダビデとその家を確認として導かれる見えざる主の存在である。数多くの詩編に表現されるように、主に完全に依り頼むダビデの信仰の姿勢とダビデを愛し恵まれる主の導きとが固く結びついていること、イスラエルに信仰にある平和をもたらしたことを、読者もまた受け取るようになるのである。

ダビデはこうしてベニヤミン出身のサウル王が成し遂げられなかった、ユダを含む全イスラエルの支配を実現した。その拠点としてベニヤミン領内の要塞エルサレムを、ダビデ王がエブス人から奪い取りヘブロンに代わる都 (サム下 5) としたのは最善の選択だったのである。

その後、サムエル記下 14 章以下 20 章に至るまで、アブシャロムの事件とダビデ王への反逆、その影響が異例とも思える長い紙面を割いて記されている。この内容は表面上ダビデと息子アブシャロムの対立のように見えるが、水面下では、どちらの王を支持するかでベニヤミン (イスラエル) とユダの人々の思惑が交差し、ぎくしゃくする流れが起こった記録が埋め込まれているのである。

この時期の攻防とダビデの行動によって、実はダビデが信頼しているのは自分の身内のユダの人々であって、ベニヤミンをはじめとするイスラエルの北の諸部族との間には身内意識はなかった

ことが露呈してしまう。それゆえ、ビクリの子シェバの放った「ダビデのうちに、我々の受け取るべき分はない。エッサイの子のうちに我々の受け継ぐべき分はない。イスラエルよ、それぞれ自分の天幕に帰るがよい」(サム下 20 : 1、cf. 王上 12 : 16) という毒舌は、それなりに的を射た評価である。ベニヤミン族のシェバは、復帰した王ダビデに対し、ユダと共有するものは本来なかったイスラエル(北部族)の正当性、優位性を主張し、イスラエルの人々のプライドを刺激することに成功したと思われる。この事件をきっかけに、ダビデ/ユダとベニヤミン/イスラエルの関係は再び硬直化し始めたのではないだろうか。

ヘルツベルクはシェバを評して、「ベニヤミン族は北と南の中間に位置する境界部族であり、他の場合でも、イスラエルの全体構造の中で或る種の不安定要因をなしている部族なのである」と断言し、<sup>76</sup>「そのような(シェバのようなサウルと同じ氏族の)人々のサークルが、ダビデの王国で不穏の種であったことは、当然のこととして理解できる」<sup>77</sup>と述べている。

この指摘はもっともで、ベニヤミン部族をダビデの王権に対する不安定で不穏の種であると思わせるのは、おそらくこの箇所の筆者の意図なのである。そして、そのようなベニヤミン族に対する否定的な先入観を読者に持たせるのに最も貢献しているのが、士師記 19-21 章なのではないだろうか。

#### 4) ダビデの王国の発展と分裂

ダビデ・ソロモンの王国の発展に伴って、ユダ部族の位置はイスラエル全部族の中で大きく飛躍したことは間違いない。ユダ以外の諸部族はこれをどう受け止めていただろうか。

ダビデの生存中は、おそらく問題は表出せず、後継者ソロモン王の時代の終わり頃までは、部族間の問題はたまりつつあるも噴出はしなかつただろう。ソロモンは父王ダビデから託された神殿建築を果たし、主の契約の箱を神殿の至聖所に収めた(王上 8)。また、イスラエル全土に 12 人の知事を置いて統治した(王上 4 : 7-19)。ソロモンの時代に王国は栄華を極めた。このように政治的・経済的に大繁栄した時代には、サウルの時のような王制そのものに反対する勢力は抑えられていたであろう。ただ、ソロモンの事業ではイスラエルの民を奴隷にこそしなかつた(王上 9 : 22)が、ソロモンはイスラエルに過酷な労働と重い軛を課したとされる(王上 12 : 4-14)。このようなユダの王の方針は、エジプトでの苦役から主に救い出された歴史の上に立つイスラエルの民の不満につ

<sup>76</sup> H. W. ヘルツベルク(山我哲雄訳)『ATD 旧約聖書註解 7 サムエル記下 2 章-24 章』ATD・NTD 聖書註解刊行会、1998 年、286 頁。

<sup>77</sup> 同上、287 頁。

ながらないはずはなかっただろう。

ソロモン王は知恵と富を与えられたが、多くの外国の女性を愛することによって主に対する背信を犯した（王上 11 : 1-8）ことが問題視される。主は怒りを発せられ、ソロモン王の個人の行いによる背信の罪が、王国分裂の原因として定められる（王上 11 : 9-12）。

主の言われた通り、イスラエルは主に背いたダビデの家に背き、ダビデの家に従ったのはユダ族のみとなる（王上 12 : 19-20）のである。<sup>78</sup> ダビデと違い、ソロモン王は主を離れた。次のレハブアム王は民心を得ず、イスラエルはダビデの家に失望して離れ、分断状態に戻ってしまう。こうして、ユダ（統一王国）から分裂したエフライム部族を中心とする北イスラエル王国が成立する。

しかし主の御心に反して、ヤロブアムは祭儀的な罪（金の子牛の像を置き、非レビ人を祭司にした：王上 12 : 25 以下）を当初から犯したとされ、北王国は南ユダ王国と反目したまま、いくたびかの政情不安を経たのちアッシリア帝国によって滅亡する。ヤロブアムに与えられた「十の部族」の消息も絶えてしまう。神の民「イスラエル」は歴史上、完全消滅に近い状況になった。

南ユダのダビデの王家は、より長く存続した。単一部族のユダの方が、結束よく外敵からの圧力に耐えられたのかもしれない。

一方、多く言われているように、北から逃れてきたイスラエルの指導的立場の人々やレビ人や祭司たちがエルサレム周辺地域、すなわちベニヤミン領を中心とする土地に移り住んでいた可能性がある。とすれば、そうした人々の間では間違いなく「イスラエル」の名と伝統は継承されていたはずで、それは南ユダ王朝にも流れ込んでいたであろう。かくしてユダは、それまでにイスラエルが有していた多くの重要なものを獲得し、それらの上にさらに主の栄光を増し加えることになる。すなわち、王権とエルサレム神殿、神の箱、主の愛。これらをイスラエルから継承し、接木されたユダが、今度はイスラエルを背負いゆくことになる。

この歴史的な変化は、政治的問題を乗り越えて生じる。つまりもともと北の部族を指していた神の民イスラエルにユダが加わり、次にこのユダが主流となって継続することで、イスラエルの概念が拡張されたと見るべきであろう。その主要な点は、律法を守る限り祝福の契約の中に守られる神の民であるということから、主に罪を赦されるほどに愛され、恵みを受ける主の民という、愛の要素が勝るようになっていく変化である。それは、その原点をダビデに置くことによって一主による選びと恵み、ダビデの罪の暴露、悔い改め、主による赦しといったダビデ物語を通して一可能になったのである。

<sup>78</sup> しかし、列王記上 12 : 21、22 には、ユダの家の全員にベニヤミン族から 18 万人の戦士が加わったとされ、「ユダとベニヤミン」が協力関係にあるように記されている。後代の付加であろう。

## 4 ダビデの家の永遠性

### 1) 王国の滅び、ナタン預言

ダビデの子らによって継承された南ユダ王国は、北王国崩壊（前 722 年）後、バビロンによって滅ぼされる（エルサレム陥落：前 587 または 586 年）まで、130 年余り存続した。

その間もユダ王国はアッシリア、バビロニア、エジプトといった近隣諸外国の圧迫を受け、宗教混淆を強要される時期もあり、ヤハウェ信仰はたえず脅かされていた。それゆえ、時の王の姿勢が重要であり、ダビデ以降の王たちは、特に主に対する信仰面においてつねにダビデと比較され、ダビデは王の基準となる。<sup>79</sup> アッシリアが衰退した紀元前 7 世紀の後半、大胆な宗教改革を行い、領土を大幅に拡大したヨシヤ王は申命記史家によって絶賛される（王下 22 : 2、23 : 25）が、そのヨシヤ王も戦死してしまう（cf. 代下 35 : 22）。国の繁栄や存亡がその時々王に委ねられている不安定な状況が続いた。そして南王国は破局を迎える。神殿は破壊され、捕囚を経験する。ダビデ王家の終焉と荒廃したエルサレムは、全イスラエルの存亡の危機を象徴した。

当時のユダの人々は、主の民イスラエルの将来のゆくえを、ダビデ王の子孫（最後の王ヨヤキンの運命）の継続に見ようとしたであろう。<sup>80</sup> すなわち、ヨヤキンは生きてダビデ王家の子孫を残せるのか。「あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえに続く。あなたの王座はとこしえに堅く据えられる」（サム下 7 : 16）とのダビデへの主の約束（ナタン預言）は、ヨヤキンの上にも実現するのだろうか。

このヨヤキンからユダの王座を継ぐ子孫は出ないというエレミヤ預言（エレ 22 : 24、30）は覆されていない。歴代誌の系図にはヨヤキンの子孫が記されるが（代上 3 : 17 以下；マタイ 1 : 12 以下）、ユダの王国（ダビデ王朝）は再建されることはなかった。

しかし、王国の滅びは主の民イスラエルの滅びと同義ではない。

捕囚地においても主は契約の民イスラエルを顧みておられる。このビジョンを示されたのは、捕囚された宗教的指導者、知識階級、エリート層であったろう。彼らの中には神殿に仕える祭司・レビ人や王家に連なる者たちが多くいたはずだ。捕囚後、帰還した彼らを中心に、エルサレム神殿の再建工事とともに、ダビデが強く思い起こされたであろう。たしかにダビデは人間的な罪を犯した

<sup>79</sup> Shimon Bar-Efrat, "From History to Story - The Development of the Figure of David in Biblical and Post-Biblical Literature, *For and Against David: Story and History in the Books of Samuel*, eds. A. Graeme Auld, Erik Eynikel, Uitgeverij Peeters, 2010, pp. 47-56.

<sup>80</sup> Brueggemann は、前 598 年にバビロンに連行されたユダの最後の王ヨヤキンの運命と、荒廃した国土の将来に関する問題が、紀元前 6 世紀のイスラエルとくに申命記史家たちにとっての最大の課題であったろうと指摘する。Brueggemann, op.cit., "Heir and Land", pp. 84-8.

が、信仰において主と固く結ばれた王であった。主に愛され罪赦されたダビデの存在は、捕囚期という裁きの期間を経たイスラエルの民心に寄り添うものだったろう。ダビデは詩作や音楽に秀で戦術や人心を掴むことに長け、主に愛された人物としてサムエル記に描かれる。のちに理想的な人物として聖書諸文書に描かれ、さらにユダヤ教の伝統において理念となった。<sup>81</sup>

こうして破滅の後に、ユダ族の頭であるダビデがイスラエルの星として輝くようになる。

ナタン預言（サム下7）は、ダビデの終生に関する祝福であった可能性がある。しかし、これはのちに「永遠の契約」として拡張的に受け止め直され、無期限の約束として、あるいは現実と断絶された彼岸的希望として〈終末論的に〉解釈されるようになったのではないだろうか。ナタン預言を通して、主の家（神殿）とダビデの家の二つの家（בֵּית）とが、分かちがたい共存関係に置かれたことが暗示されているのである。

主の臨在の象徴でありイスラエル 12 部族全体のアイデンティティーであった「神の箱」の管理保護が、最終的にユダ族のダビデの家に委ねられたこともここに含まれるであろう。モーセ以来の主の契約の箱は、イスラエル（エフライム）からユダの家、ダビデの手へと移されたのである。それはイスラエルに対する主の永遠の契約の証と祭儀共同体の中心をダビデが得たことを意味する。

## 2) 主の約束とダビデの永遠

もちろん、神の箱も神殿も木で作られた容れ物にすぎない。有限であるゆえ永遠に存在することはできない。箱への言及はエレミヤ書3:16が最後で、実際バビロンによって神殿が破壊されたときに箱も焼失したようである。人々はそれを「求めもせず、改めて作ろうともしない」（エレ3:16）の預言通り、第二神殿時代には神の箱は存在しない。しかしそれはイスラエルが、亡国の歴史を経て、主の臨在の象徴物より、中身である主の御言葉（律法）にこそ重要な永遠性があるということ、すなわち「神の言葉はとこしえに立つ」（イザヤ40:8）という真理に到達したことを示すであろう。

歴史の寸断や政治的な絶望がある時こそ、時代の変化や人間の営為によらない自由な御意志によって民の生の只中に介入され、歴史を導かれる主が立たれるのである。国家崩壊の中で、主に愛された王ダビデが思い起こされ、「イスラエルの王座をとこしえに（לְעוֹלָם）存続させる」（王上9:5）との主の約束を根拠に、民族再興の希望を主に託すとともに、ダビデを理想の王、さらにイスラエル国家復興の象徴／理念とする気運が次第に生まれたのだらうと考えられる。

ダビデ／ユダの運命が亡国のイスラエルの将来と重ねられてゆく変動の中で、ダビデの子孫に対

<sup>81</sup> Bar-Efrat, op.cit., p.56.

する祝福の永遠性を「保証」するのは、主の約束においてしかない。そこに目を向けるとき、神の民の永遠性は、地上の国家再建（人間の営為）の成否にではなく、民が主の教えを守り、真に主を礼拝することの中にあることを知るようになるのである。

それは国家という容れ物が壊れ、神殿祭儀が行えなくても、主から与えられたトーラーと、それを守る民の命の継承が有る限り、主の永遠なる御言葉は保たれうることを意味する。ダビデ／ユダの家が永遠に継続することで、絶えず新しいイスラエルが、主をつねに礼拝する民として再生産されるゆえに、主のとしえの契約は保証されるのである。

こうして、神を高く崇めたダビデは、永遠の主の約束と共に歩んだ王として、モーセと同じような立場に立つようになる。ここにおいて、神の法と王座の永遠性がダビデにおいて融合される。

主が顧みられるユダの家、ダビデ王家の正当性はこうして主張され、次第に確立していった。それはイスラエルに対するユダ、サマリヤ教団に対するエルサレムの聖所が、正統的イスラエル信仰の継承者であることを主張する必要があったからこそで、それはおそらく捕囚後のことである。そして、イスラエルの復興（建国・独立）はダビデの子孫から起こると期待（メシア思想）が根を張るようになり、さらに新約聖書において、ダビデの子とみなされた主イエス・キリストへとつながるのである。

## 5 小結論

イスラエル 12 部族の中で中心的位置を占めるユダ族は、他の部族と異なり、その成立・発展ともダビデの台頭と深く関わる。ユダという名の個人・子孫の継続という一側面からこの部族をとりあげたとき、創世記の随所、特に創世記 38 章のユダ物語、またルツ記を經由してダビデの家の継続の希求につながる道筋を見ることができる。ユダの系譜の子孫の誕生についての叙述から、個人の行いの是非や、家の中の対立や危機を乗り越えて、主の選びの家系の継続を願われる、永遠なる主の慈しみがあることが浮き彫りにされる。

ダビデは、「神の箱」の移動に象徴されるモーセ由来のイスラエルの法の伝統をユダ（エルサレム）に据え、確立させたことを通して、王国崩壊後の民の希望の指標となっていた。これは、地上に「ダビデの子ら」を栄えさせることによって、永遠の主をとしえに礼拝する民が存続することの願いの反映でもある。

## 第7章 捕囚後の「ユダとベニヤミン」<sup>82</sup>

この章では、イスラエルが王国の滅亡と民族の崩壊を経験した後の時代において、イスラエルの歴史が再編成される過程でイスラエル 12 部族がどのような形で再生されようとするのかを、旧約聖書の歴代誌の視点を通して考察した。歴代誌は特徴的に、ダビデを中心に据えており、ユダ族を最重要視するが、ベニヤミンに対しても特別な位置を与えている点が注目される。

旧約聖書の特に捕囚後の文書においては、独立した王国の消滅以降もこの 12 部族を治めるのは主の主権であるという主張が鮮明になる。その過程において、歴代誌は、主の担い手であるレビ族（レビ人）を軸に、「ユダとベニヤミン」によって再統合される「全イスラエル」の理想的統一を掲げ、その主張のもとに、イスラエルの歴史を再編集した。

捕囚後の神殿や神の箱も失われた現実の中で、歴代誌は、ダビデ・ソロモンによって確立されたエルサレム神殿を中心とするユダヤ人共同体の理想的組織の継続を描くのである。冒頭に 12 部族の系図を記すこともその主張の表れである。同時に、その系図も部族ごとの扱いが多様であることから得られる情報も多い。系図において、歴代誌の書き手と思われるレビ人（レビ族）やダビデの部族ユダと並ぶベニヤミン部族への重視は特筆すべき点である。サウル王は排除するがベニヤミン族は無視しない歴代誌の視点は、この部族の歴史的かつ現実的な重要性を物語るものであろう。

また、エステル記は、離散の民のサバイバルの物語としてベニヤミンの子孫の活躍と繁栄を書き留めている。<sup>83</sup> エステル記が正典であることは、最終的にイスラエル 12 部族を代表するのは、ダビデ王由来の政治的筆頭のユダ族、および主の担い手であるモーセ以来のレビ人（レビ族）の傍に、もう一つの王的部族ベニヤミンが立っていることを主張するものである。ベニヤミン族はイスラエルの最初の王を出し、ヨセフの家の系譜に結びつきの強かった部族として、全イスラエルの一翼を担う存在であり続けたことを、我々は認めないわけにはいかない。

## 結 び ～イスラエル 12 部族の陰影と栄光～

本研究の主要な試みは、旧約聖書に刻まれる各部族の記憶や伝承の大小の痕跡をたぐり寄せて、

<sup>82</sup> 歴代誌におけるユダとベニヤミンについてのより詳しい論述は、拙論「歴代誌におけるベニヤミンの位置付け」（『伝道と神学』No.11、2021年）45-62頁を参照されたい。本稿は、紙面の制約上、論文の第7章全体の要約の掲載にとどめた。

<sup>83</sup> 第7章におけるエステル記についての論述は、本稿では省略した。拙論「エステル記における重層的構造」（『神学』75号、2013年）331-352頁も参照されると幸いである。

イスラエル 12 部族に関する歴史の変遷と陰影の有りようを探求することであった。

大局的には一つの統合体のように見られうるイスラエル 12 部族であるが、その実態は非常に複雑で多様である。各部族間で濃淡があるが、旧約聖書には諸部族に関する比較的多くの素材（伝承、資料、物語の類）がある。それらに基づいて研究を進めたが、諸部族の歴史的な変遷の全貌を見極めるにはさらに深く広範囲な探求を要する。もとより重層的で複雑で全貌を掴みにくいのが旧約聖書であるが、本研究の中で、部分的・断片的ではあれ、新たに明らかになったこともあった。

総じて、イスラエル 12 部族内部での位置付けを考察すると、各論で取り上げたレビ、ヨセフ（マナセとエフライム）、ダン、ベニヤミン、ユダは、明らかに、ある時期あるいは全時代を通してイスラエルの重要部族であった。そしてダビデ王国時代以降の「ユダ」との歴史的な関係においてユダ以外の諸部族の運命は決定付けられたと言える。

イスラエルを構成する 12 部族は、対外的には主の名のもとに結束する宗教的民族的共同体である。しかしその内部では、部族間の指導的地位をめぐる競争と変遷、反乱や戦争まで含む負の歴史を確かに経験した。その中であって祭司的部族としてのレビ、王国時代の成立と繁栄に資したベニヤミンとユダの三つは、内部の対立と存亡の経験を経て、神殿崩壊・王国消滅後も中核的部族として存在しつづけて宗教的政治的責任を担った。それらの記憶や伝承を旧約聖書のテキストや物語の中に埋め込み、主の民イスラエルとしての尊厳を保持し、その歴史を過去から現在、そして将来へと書き綴った著者は、主であり、主の担い手であるレビ人であろう。最終的に（終末論的に？）12 部族からなる神の民イスラエルは、この主の支配の下で永遠に続くという主張がなされている。

旧約聖書におけるイスラエルは、もともとは定住の地を持たない遊牧民あるいは外国の寄留者であったが、主なる神の民となる契約の下で信仰共同体として発展し、実体を持つようになった民族的存在である。実際に土地に定着し、指導者や王を出し、宗教的基盤を形成し、政治的に国家を建設するといったこの民の歴史を体現したのは、紛れもなく「イスラエル 12 部族」の子らである。このことは旧約聖書全体が証言し、主張している基盤である。イスラエルは 12 部族によって形成され、保たれるという大義に基づいて、旧約聖書が編纂されたと言っても過言ではない。

ただその際に、イスラエルの名が退けられず、むしろ、永遠の主の民イスラエルは 12 部族からなるとの主張または神学的思想が掲げられた理由は、ユダ単独ではない「ユダとベニヤミンおよびレビ人」を主体とするイスラエル 12 部族の子らがこれに関与していたからであろう。

（みやざき・かおる）

のを、一部訂正の上、公表するものである。